

2016年度 センター試験 本試験 国語

第1問 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	24分	出題。 土井隆義の『キャラ化する／される子どもたち』からの出題。	センター試験の国語は、長年にわたって平均点が6割に満たず、特に2014年度は過去最難関レベルの出題だったために平均点が大きく落ち込んだ。ただ、2015年度からは標準レベルの問題に戻され、2016年度は設問そのものもやさしかった。2016年度はここ数年でまれにみる「やさしいセンター国語」で、正解の選択肢にたどり着くのは容易であり、平均点も非常に高かった。 設問の中では、問3は誤った選択肢を消去法で選ぶのが難しいといえるかもしれない。こうした設問には、一見論理的に正しいように思われる選択肢が紛れ込んでいることが多いが、正解の選択肢は、必ず本文にある根拠に基づいて作られている。紛らわしい選択肢に惑わされないよう、選択肢を見る前にはまず、解答の根拠を拾っておこう。その際に、本文全体から根拠を探すのではなく、その設問に関する内容を中心に述べた箇所（これはおおよそ意味段落に相当する）から探すとよいだろう。こういった「解答範囲」を絞れるようになることと本文の読解はずっと楽になるはずだ。

本文解説

段落解説

I キャラクターのキャラ化（第1～第3段落）

筆者は本文の導入として「着せ替え人形のリカちゃん」の話題をもち出す。「リカちゃんの捉えられ方」に変化が見受けられるというのだ。かつてのリカちゃんは、発売元が提供した情報をもとに作られた「憧れの生活スタイル」を演じる「イメージ・キャラクター」であり、リカちゃんのようなストーリーは誰にとっても共有された唯一のものであった。しかし、平成に入ってからリカちゃんはリカちゃん自身のストーリーから離れ、ミニーマウスやポストペットといった「別キャラクターを演じる」ようになった、と筆者は述べている。すなわち、「特定の物語を背後に背負ったキャラクター」が「その物語の枠組から徐々に解放され」、「どんな物語にも転用可能なプロトタイプを示す言葉となったキャラ」へと「変容」したというのである。

II 価値観の多元化と現代人のキャラ化（第4～第6段落）

筆者は〈I〉で述べたような「キャラクターのキャラ化」の現象は「現代人の心性」の変化と結びつけられると主張する。前時代的な社会では「人びとに共通の枠組を提供していた『大きな物語』が存在し、人々は一貫した価値基準の下、自らのアイデンティティを構築した。したがって当時は「付きあう相手や場の空気に応じて表面的な態度を取り繕うこと」は「自己欺瞞と

感じられて後ろめたさを覚えるものだった」が、現代の「価値観の多元化」によって「複雑になった」人間関係を乗り切るため、現代人は「状況に応じた切り替え」られるその場に適した「キャラ」を演じるようになった。この「一貫した」「アイデンティティ」から「断片的な」「キャラ」への人格イメージの変化は、〈I〉で述べた「特定の物語を背後に背負ったキャラクター」が「どんな物語にも転用可能なプロトタイプを示す言葉となったキャラ」へ変わったことと並行しているのではないかと筆者は言っている。

III 「キャラ」は不誠実か(第7～第12段落)

第7段落以降は「では」と話題の転換を図り、〈II〉で述べられた現代人のキャラ化の是非を問う展開となる。第7段落から第9段落では〈II〉で述べられた内容をさらに深め「価値観の多元化」によって複雑化した「現在の人間関係」の説明がなされており、従来の「一貫したアイデンティティ」では「生きづらい錯綜した世の中」になっていると述べる。その一方、場面ごとに切り替わる「生身のキャラ」は「あえて人格の多面性を削ぎ落とし、限定的な最小限の要素で描き出された人物像」であり、その単純さゆえに受け入れられやすく「錯綜した不透明な人間関係」を明瞭でわかりやすいものにしてくれるのだという。だからこそ、〈II〉で述べられているような「一貫した」「アイデンティティ」から「断片的な」「キャラ」への人格イメージの変化は起こった、あるいは起こらざるを得なかったのである。このように〈III〉では現代人のキャラ化に対するある種の弁護が行われており、次の結論へつながっていく。

IV 誠実さの基準の変化(第13～第15段落)

〈III〉の内容を「こうしてみると」以降3つの段落でまとめ直して、最終的な結論へもっていく。すでに述べられているように、「外キャラの呈示」は「複雑化した人間関係」の崩壊を避けるための技であり、したがって「外キャラを演じること」は「自己欺瞞」ではない。また、それは「自分らしさ」を「ある側面だけ切り取って強調」しているという意味で「個性の一部」なのだ
と筆者は続ける。こう考えてみると、各個人の「キャラ」はジグソーパズルのような「人間関係」を構築する上でどれ一つとして欠けてはいけない個人的なピースであり、その意味で自分を「キャラ」として呈示することは「人間関係」の維持に不可欠なことから「誠実な態度」であるといえないか。こうして筆者は現代のような「価値観が多元化した相対性の時代」では、かつての人びとに共通の枠組を提供していた「大きな物語」が存在した時代とは異なり、もはや「外キャラを演じること」は「自己欺瞞」ではなく「誠実さの基準も変わっていかざるをえない」と本文を締めくくる。

百字要旨

価値観の多元化した現代、人々は場に応じたキャラを演じることで複雑化した人間関係を乗り切ろうとしている。これは人々がうまく共生するための一つの技法であり、現代のような相対性の時代では誠実な態度である。

(99字)

用語解説

アイデンティティ 人格における存在証明または同一性。ある人が一個の人格として時間的・空間的に一貫して存在している認識をもち、それが他者

からも認められていること。自己同一性。同一性。ある人や組織がもっている、他者から区別される独自の性質や特徴。

多元 多くの根源や要素があること。

自己欺瞞ごまか 自分の心をあざむくこと。自分の良心に反する言行をすること。

錯綜さくそう 複雑に入りくむこと。入りまじること。複雑に組み合わせること。

臨機応変 機に臨み変にに応じて適宜な手段を施すこと。

呈示 さし出して見せること。

予定調和 各要素が最終的に秩序立った状態になること。

設問解説

問1 1 5

正解 (ア) ③ (イ) ⑤ (ウ) ⑤ (エ) ③ (オ) ⑤

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 知識・教養

解説

たかが漢字1問だが、「されど漢字1問」である。傍線を引かれた漢字、選肢の漢字ともにすべてを書けるように学習すれば、練習のときには知識の漏れがないかを確認できるし、本番では勘違いによる失点を防げる。

解答選択肢

- (ア) 繕う ①漸増 ②全容 ③宮繕 ④学生然 ⑤禅問答
- (イ) 収束 ①反則 ②促進 ③閉塞 ④即発 ⑤束縛
- (ウ) 顧みても ①故意 ②古式 ③鼓舞 ④孤独 ⑤顧慮

- (エ) 回避 ①大会 ②大海 ③転回 ④下界 ⑤開陳
- (オ) 縮減 ①祝 ②肅々 ③宿敵 ④淑女 ⑤緊縮

問2 6

正解 ①

難易度 ★☆☆☆☆

所要時間 3分30秒

設問パターン 内容説明型

解答範囲 〈I〉(第1〜第3段落)

解説

「変容している」とは、どういふことなのかを問われているので、「リカちゃんの捉えられ方」が何から何に変わったのか述べられている部分に注意して読もう。

どのように変化したかという問いへの抽象的な答えは、傍線部分の直前から簡単に見つけることができる。「評論家の伊藤剛さんによる整理にしたがうなら、特定の物語を背後に背負ったキャラクターから、その略語としての意味から脱却して、どんな物語にも転用可能なプロトタイプを示す言葉となったキャラへと」変化したのだ。では、この「特定の物語を背後に背負ったキャラクター」や「どんな物語にも転用可能なプロトタイプを示す言葉となったキャラ」とは、いったい何か。より具体的に考えるために第1段落から第3段落までの部分を見ていこう。

平成以前のリカちゃんは「子どもたちにとって憧れの生活スタイルを演じてくれるイメージ・キャラクター」だった。リカちゃんは「設定されたその物語の枠組」に「縛られ」、リカちゃんのキャラクター性はその枠組みから決

して出ないものだった。子どもたちはリカちゃんの物語の中に身を置き、その世界観を壊さないように「ごっこ遊び」をしていたのである。しかし、平成に入ってからのリカちゃんは「その物語の枠組から徐々に解放され」、「別キャラクターを演じるようにも」なった。筆者は、同じような特徴をもつ事例として「やおい」を挙げ、「物語から独立して存在するキャラ」を「あらかじめそのキャラに備わった特徴は変わ」らず、「当初の作品のストーリーとはかけ離れた独自の文脈のなかで自由に」行動するキャラだと論じている。ここまで読解した上で選択肢を見ると、「変容している」の内容、「どんな物語にも転用可能なプロトタイプを示す言葉となったキャラ」といった言い換えや第3段落の「やおい」の例などをふまえ、適切に言い換えられていた①が正解。

不正解の選択肢

- ② 『ごっこ遊び』に使われることで」という因果関係は本文中には書かれていない。「世代ごとに異なる物語空間を作る」という部分も本文とズレる。「世代」についての言及も本文中にない。
- ③ 本文中の「国民的アイドル」は世代を超えて愛されるキャラクターを喻えたもので、玩具の域を越えるものではない。よって不適当。
- ④ 前半部分は良さそうだが、「より身近な生活スタイルを感じさせるものへ変わっている」の箇所が間違っている。この書き方だと、「憧れ↓庶民的」の意味での変化ということになる。そうではなく、「特定の物語をもたなくなった」という意味での変化である。
- ⑤ 「自由な想像力を育むイメージ・キャラクターとして評価されるものへと変わっている」という内容は本文に書かれていない。結果的にはそういえるのかもしれないが、「物語を失った」という内容が書かれていなければならぬ。

問3 7

正解 ②
 難易度 ★★★★★

所要時間 5分

設問パターン 内容説明型

解答範囲 Ⅱ(第4～第6段落)

解説

紛らわしい選択肢が多いので本文を吟味して慎重に選択肢を消去しよう。Ⅰ(第1～第3段落)での考察を「現代人の心性」と関連させて述べている。筆者によると、現代では「人びとに共通の枠組を提供していた『大きな物語』が失われてしまい、「価値観の多元化によって流動化した人間関係」のなか「それぞれの対人場面に適合した外キャラ」を演じるようになったのだという。この問題では「人びとに共通の枠組を提供していた『大きな物語』とその中で生きる人々との関係について問われているので、第5段落冒頭にあるように「大きな物語」がまだ存在した時代を「振り返って」、その関係がどのようなものだったのか考えよう。第5段落には以下の記述がある。「付きあう相手や場の空気に応じて表面的な態度を取り繕うことは、自己欺瞞と感じられて後ろめたさを覚えるものだったからです。アイデンティティとは、外面的な要素も内面的な要素もそのまま併存させておくのではなく、揺らぎをほらみながらも一貫した文脈へとそれらを収束させていこうとするものでした」。

ここでは、人びとの「アイデンティティ」、すなわち「人格のイメージ」と

は、「外面的な要素」と「内面的な要素」を併存させるのではなく、「一貫した文脈へと」「収束させる」ものであったことが述べられている。さて、その過程における「揺らぎ」とはいったい何だろうか。第5段落3文目をよく見直すと、「外面的な要素」と「内面的な要素」を「一貫した文脈へと」「収束させていこうとする」ときに、そこに「揺らぎ」がはさまれているのだと述べられている。ここから、「揺らぎ」とは、二つの要素の収束が揺らいでしまうこと、すなわち、外面的な要素と内面的な要素の隔たりが解消しきれないことを指しているのだと考えられる。「表面的な態度を取り繕うことは、自己欺瞞と感ぜられてしまうためたさを覚えるものだった」時代、一貫したアイデンティティを形成しようとしながらも外面と内面に隔たりが生まれてしまうことは、後ろめたく思い悩むようなものであったことも想像できる。これらの内容をすべて含んでいる②が正解。

不正解の選択肢

- ① 「大きな物語」が共有されていた時代は「一貫した」人格イメージが追求されたのであり、「複数の人格のイメージを使い分けよう」とはしていない。
- ③ ①と同様「社会的に自立した人格のイメージ」が求められたのではない。本文にも言及がないため、不適当。
- ④ 第6段落に「アイデンティティは」「社会生活のなかで徐々に構築されていく」とあるように、人格イメージは「生まれもった」ものではない。
- ⑤ ②と⑤はどちらが正しいかを考えるのは難しい。「自己の外面的な要素と内面的な要素とを合致させながら」という⑤の記述は、本文中の「一貫した文脈へとそれら（＝外面的な要素と内面的な要素）を収束させていこうとするもの」という記述の換言であり、「個別的」「偽りのない人格」

という⑤の記述も悪くないように思える。だが、「自己の外面的な要素と内面的な要素とを合致させながら」という記述には、「揺らぎをはらみながら」というニュアンスが含まれていない。よって、⑤よりも②のほうが適当である。

問4

8

正解

④

難易度 ★★☆☆☆☆

所要時間 3分30秒

設問パターン 理由説明型

解答範囲 Ⅲ(第7～第12段落)

解説

第9段落から第11段落の文脈を確認し、単純明快なキャラが、どのような役割を果たすのかを考えよう。

傍線部直後に「そのためでしょう」とあることから「その」の指示内容が傍線部の理由にあたる。指示内容はもちろん傍線部直前の内容であるが、まずそこまでの本文の内容をおさえておこう。第7段落での「自分の本心を隠したまま、所属するグループのなかで期待される外キャラを演じ続けることは、人間として不誠実であり、いい加減な態度なのではないか」という問題提起以降、「価値観の多元化」によって複雑化した「現在の人間関係」の説明とそのなかでの「キャラ」の意味について述べられている。第10段落にあるとおり、結局「あえて人格の多面性を削ぎ落とし、限定的な最小限の要素で描き出された人物像」である「キャラ」は「錯綜した不透明な人間関係を単純化し、透明化してくれる」というのである。これをふまえ、傍線部直前を

見ると、「最小限の線で描かれた単純な造形」(第10段落冒頭)をもつ「日本発のハローキティやオランダ発のミッフィー」が「特定の文化を離れて万国で受け入れられている」ように、人間においても「きわめて単純化された人物像」は「特定の状況を前提条件としなくても成り立つ」ため「どんなに場面が変化しようと臨機応変に対応すること」ができる。「そのため」(第11段落、傍線部直後)「生身のキャラ」に「単純明快でくつきりとした輪郭」が要求されるのである。以上の第10、11段落を中心とした内容が適切に述べられている④が正解。

不正解の選択肢

① 「他人と自分の違いが明確になり、互いの異なる価値観も認識されやすくなるから」が不適当。「きわめて単純化された人物像」は『錯綜した不透明な人間関係』を単純化し透明化してくれる」のであり、価値観の認識とは関係がない。

② 「個性がはつきりして際立っているほうが」という表現には、「単純」という「キャラ」を構成する要素が欠けており、人物像の「個性」ではなく単純さが求められる理由について問われている題意に合致しない。また、「他人と交際するときに自分の性格や行動パターンを把握されやすくなる」も、①と同様に関係ない。

③ 「個性を堅固にしたほうが」は、本文には書かれていない表現。「単純化された人物像」については、「人格の多面性を削ぎ落とし、限定的な最小限の要素で描き出された人物像」(第10段落2行目)としか書かれていないので、「個性を堅固」とまで言い切れない。また、結論にある「文化の異なる様々な国での活躍が評価されるようになる」は傍線部前からの論旨にそぐわず不適当。

⑤ 「人物像が特定の状況に固執せずに素朴であるほうが」とあるが、「素朴」かどうかは本文中で論述されていない。また、結論部分で、「現代に生きづらさを感じる若者たちに親しまれるようになる」とあるが、本文中の「アイデンティティをもつ人は生きづらい現代」「若者は人格をアイデンティティというよりはキャラとしてイメージする」「人間関係における一貫した評価基準はない」といった内容から、⑤のように「若者は現代を生きづらいと感じている」とは言い切れない。

問5

9

正解

②

難易度

★★★☆☆

所要時間

4分

設問パターン 特殊型

解答範囲 〈Ⅳ〉(第13～第15段落)

解説

近年はみられなかった形式の出題だが、ほかの問題と同様落ち着いて、誤ったものを消去して回答していこう。出題形式こそ特殊ではあるが、本文の締めくくりにあたる箇所が傍線で示されていて、結局のところ問われているのは本文の結論である。「価値観が多文化した相対性の時代」において「誠実さの基準」がどう変わっていくべきなのかという問いを、これまでの内容を振り返りつつ確認する。「一貫したアイデンティティの持ち主では、むしろ生きづらい錯綜した世の中」(第9段落)である現代において、「錯綜した不透明な人間関係を単純化し、透明化してくれる」「キャラ」(第10段落)の呈示は、「コミュニケーションを成立させていくための技法の一つ」ではないかと筆者は

述べる。したがって、「外キャラを演じること」はかつて「自己欺瞞と感じられて後ろめたさを覚えるものだった」が、現代ではもはや「自己欺瞞（＝不誠実）」ではなく「他者に対して誠実な態度」なのではないか。これこそが「誠実さの基準も変わっていかざるをえない」理由である。

まとめると、自分に期待された単純な外キャラを演じるというのは、個性の一部をピックアップして見せているだけという点で人格に偽りはなく、価値観が多元化した現代において価値観をまったく異にする他者と友好的な関係を保とうという「誠実さ」の表れということだ。以上の内容を、過不足なく述べている②が正解。

不正解の選択肢

① 「そんな時代だからこそ」以下の記述が、「キャラ」についての議論と正反対で、「キャラを演じ分ける」ことがなぜ誠実といえるのか、という部分にまったく触れられていない。

③ 「自分らしさを忘れないように意識すべき」とあるが、アイデンティティ重視の議論「他者よりも、まずは自分に対して誠実でなくっちゃ」という比較の内容は本文中にはない。

④ そんなに悪くなさそうにもみえるが、「自分の意見や感情を前面に出すのは、むしろ不誠実」とは本文中に書かれていないため、不適当。

⑤ 「自分らしさにこだわられるのも、こだわらないのも自由」という内容は、本文中には存在しない。「相対性の時代」とは、「価値観が多元化し、すべての人が共有する価値基準がなくなった」ことを指しており、自分らしさとは関係ない。本文では「演じ分けることの必要性」が長々と語られているから、「キャラを演じてもいいし、演じなくてもいい」わけがない。「他者に対する誠実さそのものが成り立たない時代に来ている」とい

う結論も、見当はずれとしか言いようがない。むしろ、現代は「キャラを演じ協力し合うことで人間関係を穏便に乗り切る」という他人への誠実さ」がきちんと成立している。よって、この記述は不適当。

問6 (i) 10 (ii) 11

正解 (i) ① (ii) ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 6分

設問パターン 表現・構成

(i)

解説

表現・構成の問題は毎年出題されている。2016年度は「適当でないもの」を選ばせる問題なので、文章を読む前に問題を確認して本文を読み進めながら解いていこう。

「演じてくれる」というのは、「演じてもらう側」から「演じる側」への敬意の表現なので、適当でない選択肢である正解は①となる。単純な敬語表現の問題だ。

不正解の選択肢

② 普通、他人の意見を引用するときは、そうとわかるようにする。これは引用先に対する敬意の表現であるとともに、ほかの人はあのように言っているが（それが正しいか間違っているかはともかく）自分はこのように考える、という書き方。自分の意見を差別化し、説得力をもたせるための書き方でもあるので、この記述は適当である。

③ 「くようにも思われる」と二重でほかした表現をしている。「あなたはズ

ルをしています」「あなたはズルをしています」「あなたはズルをしているようにも思われます」と書けば、順に主張が「ぼんやり」していると思われるだろう。よって、この記述は適当である。

- ④ 第5段落3行目の「揺らぎをほらみながらも」という表現だが、「ほらむ」は妊娠するという意味で使われることがあるのを思い出し、イメージ的に判断すれば「外側から見えなくても確かに存在する」という表現は適当であると思われる。

(ii)

解説

第12段落で初めて「感情」という言葉が出てきたが、これはここまで問題になった「人間関係」について突っ込んだ表現だと考えられる。③は百貨店やコンビニエンス・ストアの接客態度を事例に挙げているが、第13段落以降も一貫して「キャラを演じ分けることで人間関係を乗り切る」ことについての論が展開されているので、「論述方針の変更」があったとは考えにくく、この記述は不適当。正解は③。

不正解の選択肢

- ① 「現代ではキャラを演じ分けて人間関係を乗り切ろうとしている」ことについての議論をふまえ、第7段落でそれが「不誠実かどうか」という新たな問いを立て、「価値観が多元化した現代」という論点を提示している。この記述で特に問題はなさそう。

- ② 「単純さ」について、現実の人間だけでなく、ハローキティやミッフィーといったキャラクターについても同じような効果が働くことに言及し、さらに、「印象的になるだけでなく、万国で受け入れられる」という別の観点も提示している。この記述で問題はなさそう。

- ④ キャラを演じ分けることの意味について説明したのち、カラオケや着メロといった具体例を挙げて、「キャラを演じることは不誠実かどうか」についての結論を導き出している。この記述で問題はなさそう。

(制作…小島朋朗、森慎太郎)

2016年度 センター試験 本試験 国語

第2問 小説

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
難易度 ★★☆☆☆	20分	2015年度の第2問の小説がごく最近の作品であったのに対し、2016年度は1950年代に発表された作品（佐多稲子の小説『三等車』）からの出題であった。だが読みにくいものではなく、比較的やさしい文章であった。	<p>出題形式に変更はなく、設問もひねつたものはない。文章量も2015年度並みか、やや多い程度。</p> <p>問1は例年に比べ簡単で、常識ともいえる表現が出題された。このような表現の意味を問う設問では、文脈上正しいかなひっかけの選択肢が用意されていることが多いので、本文の流れで意味を予想・判断したりせず知識問題として解くことが肝要である。</p> <p>問5は本文全体の内容を踏まえて解かなければならず広い視野が要求される。このような解答範囲の広い設問は、先に設問内容を把握しておけば効率的に解答できるだろう。</p> <p>また、評論（第1問）同様、問6は適当でないものを選ぶ設問であることに注意しておこう。試験本番では緊張して、いつもならあり得ないようなケアレスミスをしてしまいがちなので、普段から設問文を注意して読む癖をつけておこう。</p>

本文解説

段落解説

I 三等車に乗りこむ「私」(1～30行目)

鹿兒島ゆきの急行列車に乗り込んだ「私」は、二百円で座席を買った。座席を闇で買うことは初めてだったが、「私はその男（坐席屋）との応対も心得たふうに言つて、内心ほっとし」ていた。「私」は今朝まで仕事があり、目的地に着いたあとまた用事があったため、座席を闇で買ったことに「周囲に對して少し照れながら」も、座ることができて「再びほっとし」た。三等車の中は「小さな所帯をいっぱい詰め込んだように、荷物などもごたごたしていた。

前の座席に座っていた、やはり闇で席を買った婦人と会話を交わし、同じ値段で座席を手に入れたとわかり、「私」と婦人は安堵した（おそらく坐席屋にぼったくられていないと判明したため）。

II 工員ふうの若い夫婦が乗り込む(31～68行目)

「私」の座席のすぐ近くに工員ふうの若い夫婦が乗り込んでくる。痩せていておとなしい三つ位の男の子（「ケイちゃん」）を連れており、妻の方は赤ん坊を負っている。「人混みにのぼせたように泣き出しはじめた」赤ん坊を、妻はあやすが泣き止まず、夫が舌打ちして「赤ん坊の口にビスケットをねじり込む」ようにする。「何とか泣きやませせないか」と苛々とした声で言う夫

に対し、「おながが空いてるのよ」と妻は当てつけるように言う。とげとげしい雰囲気夫婦はどうかやら汽車に乗る前にも『言い合いでもしてきた調子』だ。夫は見送りに来ただけのようで、黙ったままの妻を残し男の子に構うこともなく出て行く。妻は「ひとりになった覚悟をつけた」様子を見せる。男の子を残して出て行くこうとするので、「私」はその間、男の子を見ていることを若い母親に約束する。

Ⅲ 去ったはずの夫が子どもと別れの挨拶をする (69～118行目)

やがて発車のベルが鳴り、「それまで姿の見えなかった、若い父親が、ホーム側の窓からのぞき込んで」男の子と別れの挨拶をする。男の子は始終黙っており、列車は出発して父の姿が見えなくなると「ちゃんと承知したように、反対側の私のそばに戻って、動いてゆく窓の外をのぞいた」。しばらく時間が経ったあと、若い母親はお茶のびんを抱えて戻ってきた。「私」は彼女が「言い合いのまま車を出ていった夫が、やっぱり発車までホームに残っていたということを知らずにいる」ことを残念に思っ、そのことを伝える。

若い母親は車内で赤ん坊の乳を作り始めた。赤ん坊に「乳をのませながら、彼女は胸につかえているものを吐き出すように言い出した。『男って、勝手にすねえ。封建的すわ』。彼女は「見栄もなくぼそぼそと」東京で働いている夫のため今よりもっと小さい子ども二人を連れて鹿児島から出てきたこと、今度は東京での暮らしが立ち行かなくなり夫に田舎に戻れと言われこうして鹿児島に帰ることを話した。周囲の乗客に話を聞いてもらっているうちに、「彼女は二人の子どもを連れ、明日までの汽車の中によやく腰をおろしたぶつだ」った。

Ⅳ 「私」の推察と男の子の歌 (119～141行目)

「私」は「ホームで妻子にあのような別れ方をした夫の方は、あれからどうしただろうか」「妻子が去った寂しさを一人噛み締めているのだろうか」などと妻子が去ったあとの夫の様子を細かに想像する。「私」は闇で座席を手に入れたしまったことの罪ほろぼしのように男の子を膝に抱いたままでいる。「私」は「この男の子のおとなしさは、まるでこの頃からの我が家の空気を感ず取って、気兼ねをしていたようだ」と考える。時間がたち、「列車の箱の中全体が、少し疲れてきて、あまり話し声もしくなかって」いた。「私」の耳に、ふと男の子が歌うように小さくつぶやいているのが聞こえてくる。「父ちゃん来い、父ちゃん来い」。しかし男の子の視線は「走り去る風景が珍らしいというように、みかんの木を追い、畑の鶏を見たりしている」のだ。「可憐に弱々しく、無心なつぶやきだけで、男の子は、その言葉を歌って」いた。

百字要旨

鹿児島ゆきの列車に乗り込んだ「私」と親子連れ。生活苦のため帰郷するという母と子を乗せて汽車は動き出す。愚痴をこぼす母親とは対照的に沈黙を保つ男の子だったが、無心に父親を呼ぶつぶやきをこぼすのだった。(99字)

用語解説

せかせか 物言い・動作などが落ち着かず気ぜわしいさま。

昂る たか 高くなる。たかまる。ほこる。自慢する。高慢な態度をとる。

肉感的 肉体に魅力のあるさま。性欲をそそるさま。

伏目 目を伏せて視線を下の方に向けること。うつむいて見ること。

おしめ むつき。おむつ。

うつつうしい 心がふさいで晴れやかでない。うるさい。わずらわしい。
 封建的 封建制度に特有の性格をもっているさま。俗には、専制的で目下の者の言い分を聞こうとしないさまをいう。

罪ほろぼし 善事を行って過去の罪をつぐない滅ぼすこと。罪の消えるよう
 功德を行うこと。贖罪。

可憐 いじらしいこと。かわいらしいこと。

設問解説

問1 12 14

正解 (ア) (イ) (ウ) (エ) (オ)

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 1分30秒

設問パターン 知識・教養

解説と不正解の選択肢

(ア)

「目くばせ」は「視線やまばたきで合図を送ること」なので、正解は⑤。

① 「すくむ」とは「相手をおどすような凄みのある様子を見せる」ことであ
 り、「目くばせ」には「おどす」のような意味はないので誤り。

② 「制した」では、坐席屋の男が仲間に示す態度としてはおかしい。

③ 「頼み込んだ」というのも、意味的にも状況を考えてもおかしい。

④ 「気遣った」というのも同様に誤り。

(イ)

「無造作」は「造作ないさま。あれこれ手段・技巧を弄しないさま。慎重に

構えることもなく、手軽にやっつけてのけるさま」という意味なので、正解は③。

① たしかに、「慎重でない」という説明と、「先の見通しを持たずに」とい
 う表現が近くはあるが、これだけだと「造作」すなわち「技巧。装飾」
 「手間や費用がかかること。面倒」がない、というニュアンスが抜け落ち
 てしまっているため、誤り。①はむしろ「向こう見ず」や「無鉄砲」の
 説明に近いといえよう。

② 「いらだたしげに荒っぽく」のような苛立ちの感情は、「無造作」には含
 まれない。

④ 「素早」いかどうかは問題ではない。

⑤ 「見下」しているというニュアンスは含まれていない。

(ウ)

「見栄もなく」はあまり使わない表現かもしれないが、「見栄を張る」「見栄つ
 張り」などという言葉から推測できる。「見栄を張る」とは「外観を飾る。う
 わべをつくる必要以上によく見せようとする」ことであるので、その逆
 を考えればいい。正解は②。

① 「相手に対して偉ぶることもなく」という態度は、「外観を飾らない」こ
 とから派生的に生まれるかもしれないが、説明としては不適当である。

③ 「はっきりした態度も取らない曖昧な態度」というような意味ではない。

④ 「礼儀」と「見栄」は体裁よく取り繕う点では同じだが、礼儀が人として
 わきまえるべき美德、プラスのものであり、また相手への敬意を含むも
 のであるのに対し、見栄は前述したように虚栄心と結びついたマイナス
 のニュアンスを含むものであり、相手への敬意は関係ないなどの点で異
 なっている。

⑤ 「気後れする」すなわち「自信を失ってひるむ」というような意味はない。

問2 15

正解 ①

難易度 ★★☆☆

所要時間 2分30秒

設問パターン 理由説明型+心情説明型

解答範囲 (1)～(1)～30行目

解説

1行目から30行目までの部分では、「私」が「安心した」という描写が3回登場する。12行目の「内心ほっとしていた」、18行目の「再びほっとした」、28行目の「先方も、私も、安心したようになって」だ。直接的に心情が描かれているのはこの「安心した」という表現だけなので、これらの「安心」について説明できれば解答を選ぶことができる。

まず、12行目の「内心ほっとしていた」を見ていこう。これは、直前の「座席を闇で買うのは初めてだった。が話は聞いていたので、私はその男との応対も心得たふうに言って」を受けている。闇で座席券を買うという初めての経験（それも、正規のものではない取引をするという経験）に「私」は戸惑い、緊張したと思われる。だが、「応対も心得たふうに言って」、落ち着いたやりとりができたので、どうにか無事に対処することができたと「内心ほっとしていた」のである。

次に、18行目の「再びほっとした」を見ていこう。これは、直前の「私は周囲に対して少し照れながら」を受けている。「私」は座れて単にほっとしているだけでなく、「周囲に対して少し照れ」という表現から正規ではない方法で座席を手に入れることに対して恥ずかしさ、後ろめたさを感じているのである。この「恥ずかしさ」は座席に座りたいという気持ちより弱いもので

あり、「罪悪感」など強い表現で言い換えられるものではない。また、周りから闇取引についての指摘を受けなかったことが関係していると考えるのが妥当だろう。

最後に、28行目で座席の値段を婦人と確かめあい、「先方も、私も、安心してよくなった」という描写について考えていこう。五十歳くらいの婦人と「私」はどうして安堵したのか。23行目の「あなたも座席をお買いになったんですか」から27行目の「ああ、じゃおなじですよ」までの部分、29行目の「つい、遠くへ行くんじゃないか」、30行目の「そうですね」の部分を考えて考える。どうやら、二人とも闇で座席を手に入れたらしいことがわかる。だが、そのことだけを共有して安心したのではない。二人は取引の値段が同じだったことを確認して安心したのである。闇で買う座席が「安い」ものだと一般に考えにくい。(注)にもあるように、「私」は運賃と別にお金を払ったのである。29行目には「二百円でも出していますよ」とある。それほど安くはない金額だが、自分だけが高値をふっかけられたり、相手が極端に安く購入したわけではないとわかって、「ああよかった」と思って安心したわけである。

ここまでのことを踏まえて、解答は三つの要素から構成されるだろう。すなわち、座席券を闇で購入するという初めての経験をすにあたって戸惑い緊張したがきちんと対処することができた、また闇取引をしたことに対して後ろめたさや気恥ずかしさを感じたが、闇取引を周囲から咎め立てられることはなかった、さらに年配の婦人が自分と同じように闇で買った座席の金額が同じだったことがわかった、という三つのことから安心した、安堵した、という心情にいたったということである。

一つ目の要素が欠けているが、ほかは特に大きな問題はなさそうなので、

①が正解。

不正解の選択肢

- ② 「前に座っているのが年配の女性」で「ほっとしている」わけではない。
 ③ 「闇で座席を買わされたことを耐えがたく思いながらも」が不適当。「私は自発的に闇で座席を買い求めたのであり、「買わされた」のではない。「周囲に対して照れる」にも合致しない。
 ④ 「闇で座席を買ってしまったことに罪の意識」が不適当。
 ⑤ 前半はいいが、後半の「次の仕事の準備ができる」が不適当。そのようなことは本文中に書いておらず、逆に「ほかの乗客と同じ金額であったこと……に安堵」が選択肢中に書かれていない。

問3 16

正解 ④

難易度 ★★☆☆

所要時間 3分

設問パターン 理由説明型+心情説明型

解答範囲 Ⅱ(31～68行目)・Ⅲ(69～118行目) の特に (31～85行目)

解説

心情を正しく説明しているものを選ぶ設問。本文中から「心情描写」だと考えられる部分を答えることになる。また、「何か私の方が残念な気がして言ひ出す」という傍線部そのものの意味を説明する設問としてとることもできる。これは、「該当部分をわかりやすく、できる限り本文中のほかの言葉で言い換える」という設問であり、筆者独特の言い回しや比喩などが絡んだ部分の説明が求められることが多い。

さて、「私」の心情は「残念」であり、「どうして私は残念に思ったのか」本文中の描写から考えていく必要がある。また、傍線部には「何か私の方が残念な気がして」とある。「私の方が」というのは、誰かほかに「残念」だと感じている(感じるべき)人がいるということだ。そのあたりのことを説明しなくてはならない。

「私」が「残念」だと思ったのは、84行目の「彼女は、言い合いのまま車を出ていった夫が、やっぱり発車までホームに残っていたということを知らずにいるのだ」を受けてのことだとわかる。この部分を詳細に説明する必要がありそうだ。また、「私の方が」という表現は、妻の存在があるからとわかるが、このことが重要となる。

端々の表現からこの夫婦はこの時点で相当険悪な雰囲気であることがわかる。例えば、45行目の『何とか泣きやませないか』夫は苛々するように細かい高い声で言った」という箇所や、50行目の「夫婦の会話は、汽車に乗り込むまでに、もう二人の神経が昂って、言い合いでもしてきた調子である」という箇所、52行目の「夫は、妻の口調で一層煽られたように、『じゃア、俺アもう行くよ』と言った。妻は黙って視線をはずしている」などの箇所からそれが読み取れる。

そして、55行目に「夫婦連れかとおもったが、夫は見送りだけだった。黙っている妻を残して、夫は車を出て行った。出ていったまま窓の外にも顔を出さない。妻もまたそれを当てにするふうでもなく」とあるように夫は汽車に妻を残しさっさと出ていってしまう。しかし夫のこの行動は妻子が鹿児島という遠い所に帰ってしまうことを考慮すると、とても冷たいものだ。妻は気にする様子もなく、「私」に男の子を預けどこかに行ってしまう(現代でもこういう様子の親子連れを見ると、子どもが可哀想に思え、おろおろしてし

まうだろう。ここでは描写されていない「私」の気持ちも考えながら読もう。

しかし、夫はそこまで冷たい男ではなかった。

69行目の「が、それまで姿の見えなかった、若い父親が、ホーム側の窓からのぞき込んで、男の子を呼んだ。『ケイちゃん、ケイちゃん、じゃ行っておいでね』その声で男の子は、すると人の間をホーム側の窓へ渡っていくと、黙って、その窓に小さい足をかけて父親の方へ出ようとした。はぎ古したズツクの黒い靴が窓ぶちにかかるのを、『駄目、駄目、おとなしくしてるんだよ』窓の外からその足を中へおろして、『握手、ね』と、父親は子どもの手を握って振った。ベルが止んで汽車が動き出した」という風に、夫がひょっこり戻ってきて、男の子と別れの挨拶をしたのである。もしかすると、妻とも別れの挨拶をするつもりだったのかもしれない。汽車が発発してから夫の姿が見えなくなって、妻のほうに戻ってきた。だが、84行目では「彼女は、言い合いのまま車を出ていった夫が、やっぱり発車までホームに残っていたということを知らずにいる」。

もし、夫が汽車の発車までホームに残っていたと妻が知ったら、口論のあと、吐き捨てるように別れを告げて去っていった夫への評価は改善され、妻の苛立った気持ちも落ち着くだろう。しかし、実際には妻は夫の行動を知る由もない。そのような様子を見てみると、夫も妻も不憫に思われて、「私」のほうに「残念な気」がしてきたのである。おせっかいでも、夫と言い合いをしていた若い妻に心優しい夫の一面を伝えたかったのである。選択肢を見ていくと、「男の子を見送ろうとする」とホームに残ったのが男の子のためだけであるかのような表現がやや気になるが、ほかに特に問題のない④が正解となる。

不正解の選択肢

① 「母親の苦勞が思いやられた」ということは「私」が思っているも不思議ではないが、本文に書かれていないので微妙。後半の「夫婦が険悪な雰囲気のまま別れることに耐えられなくなり、父親の示した優しさを彼女に伝えて二人を和解させたい」は言い過ぎである。夫婦に対してそのままでの積極的な働きかけをしようとしているわけではない。

② 「車内でいさかきを起こすような他人と私とは無関係」という記述はやや冷淡な印象を受け、この家族に対し子供を預かるなど温かい対応をする「私」の説明としてはそぐわない。妻はたしかに夫のことも話したが「夫の無理解を嘆くばかり」であったわけではないし、「夫のことを思いやつてほしい」と「私」が思っていたというのも本文にない記述である。

③ 「男の子が父親と別れたときのけなげな姿を母親に伝えたい」が誤り。84行目の「彼女は、言い合いのまま車を出ていった夫が、やっぱり発車までホームに残っていたということを知らずにいるのだ」というように、「私」が彼女に伝えたいのは父親の姿であって男の子の姿ではない。

⑤ 「おとなしくするように言っばかりの母親」が微妙。母親は58行目「ケイちゃん、ここで待ってなさいね。どこにも行くんじゃないよ。母ちゃん、すぐ帰ってくるからね」…(戻ってきて)…「ケイちゃん、おとなしくしてたの」と言っただけであり、これが「おとなしくするように言っばかり」といえるかどうかは微妙。また後半部も③同様、男の子の姿にフォーカスされてしまっており、不適当。

問4 17

正解 ③

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 3分

設問パターン 内容説明型+心情説明型

解答範囲 〈Ⅲ〉(69～118行目)

解説

傍線部A直後から傍線部Bのあたりまでの文章から、若い母親の心情を「私」がどう推察しているのか考える設問である。該当範囲はほぼ「私」と若い母親の会話であり、この設問は手掛かりが少ないため、選択肢を消去法で見えていくのが効率的である。ただいきなり消去法に移るのではなく、若い母親は何を不満に思っていたのか、どうして「ようやく腰をおろした」のか考えるようにしよう。いきなり消去法に入るとひっかけにかかりやすくなるため、避けたほうがいい。

まず「ようやく腰をおろしたふうだ」の意味について考えていこう。夫に苛立ち慌ただしく子どもの世話をしていた妻が「ようやく腰をおろした」のは、子供の世話が一段落ついたからである。大きい方の子どもは、「母親から貰ったビスケットを食べていたが、いつか震動の継続に誘われて私の膝で居ねむりを始めた」し(110行目)、「赤ん坊に乳をのませ」ることもできた(104行目)。母親としての仕事を終え、気持ちに余裕が出てきたのであろう。

そう考えると、「明日までの汽車の中に」という表現の意味もみえてくるのではないだろうか。母親は小さい子どもを連れて汽車に乗って長距離の移動をしなければならぬ。このような境遇にある母の苦労は想像に難くない。だが、近くの座席に乗り合わせた人たちは母親に手を貸してくれる。

95行目「私のとなりの座席にいた会社員らしい若い男も、席を詰めて、彼女の乳作りの道具をおく場所をあけてやった」、97行目「私は彼女の背中から赤ん坊をおろさせて、抱いた」、110行目「男の子は……私の膝で居ねむりを始めた」といったように、周囲の乗客は子どもの世話に手を貸している。

また、105行目の「彼女は胸につかえているものを吐き出すように言い出した」で、母親はそういった乗客たちに自分の胸中を明かしている。

しかも、乗客たちはその妻の話に共感をもって耳を傾けてくれた。107行目「会社員の男は、……好意的に薄笑をした」、110行目「私の前の中年の婦人も身体を差し出してうなずいている」、116行目「二等車の中では、聞えるほどのものは同感して聞いている」と、妻は苦労話を周りの乗客たちに共感をもって聞いてもらえ、精神的な緊張が解けてきたのであろう。

以上のことを踏まえて、解答は「長距離の移動の序盤で、まだ小さい子供の世話に追われていたが、近くにいた乗客の協力もあり、なんとか子ども世話に一段落がつき、また、乗客は身の上の苦労話に共感をもって耳を傾けてくれて、妻は落ち着いた気分になることができた」というようなものになるだろうか。選択肢を見て取捨選択していこう。

解答選択肢

① 母親が「周囲の乗客に励まされたことで冷静に」なった、というのが誤り。そもそも母親は出立の時こそ気が立った様子であったが、夫については94行目「父ちゃんがもう少し気を利かしてくれるといいんですけどねえ」、106行目「男って、勝手ですわね。封建的ですわ」と愚痴を言っただけで、「冷静に」なる必要があるほど気持ちが昂っていたわけではない。仮に苛立っていたとしても、「子育てに理解を示さない夫のぶっきらぼうな言い方」にその苛立ちの原因を限定してしまっているのも良くない。

い。周囲の乗客についても、彼女の言葉に耳を傾けただけであり、「周囲の乗客に励まされた」は言い過ぎ。

② 母親が「周囲の人たちの優しさと気遣いに感激」が言い過ぎ。たしかに彼女は彼女と子どもたちを気遣ってくれる周囲に「すみませんねえ」と声をかけており(112行目)、感謝の気持ちはあるだろうが、「感激」といえるほど感情を動かしたという描写はない。

③ 「乗客たちの助け」の要素がなく、「二人の小さな子どもを抱えて長い距離を移動する気苦労を受け入れるくらい」がそんな風に決めつけてしまっているのか微妙だが、「落ち着くことが出来た」という解答の方向性は間違っていない。この③が正解。

④ 「私」については、汽車が動き出しても母親が戻ってこないのが80行目「母親はどうしたのだろう」と私の方が不安になった」と、乗り遅れたのかもしれないと心配しているような描写はあるが、母親自身がそういった心配をし、「二等車に乗り遅れることもなく母子三人で故郷に帰れることにほっとしている」という描写はないので、誤り。

⑤ 「じっとしていられない男の子」がまず誤り。たしかに男の子はしばしば立ち上がったたりしているが、彼がおとなしい様子であるというのは繰り返し語られている。鹿児島に戻らなければならない事情や夫婦間の不満をまくし立てる「も誤り。116行目の「彼女は…ぼそぼそと話す」という本文中の箇所と矛盾するからだ。

問5

18

正解 ②

難易度 ★★★★★☆

所要時間 5分30秒

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 全体

解説

「父ちゃん来い、父ちゃん来い」と歌った男の子の様子や声から「私」が男の子の心情をどのように推察しているのか問われている。設問に「本文全体もふまえた」とあるので、本文全体から男の子の様子を拾っていく。この場合、本文全体と考えるなければならない範囲が広いため、最初に選択肢を見てありえそうにない選択肢は事前に省いておく。⑤の「男の子は父親のことだけは信頼している」ようなそぶりは見せていないため、不適当。⑤を省いたところで本文全体から男の子の様子を考えていく。

37行目「両親に連れ込まれた、汽車の中はこういうものだでもおもうように、おとなしく周囲を見て突っ立っている」

65行目「母ちゃん」と、言った。遠慮がちに心細さをつい声に出したというような、ひとり言のような声だ。『すぐ、母ちゃん来るわ』と私が言つと、男の子は窓近くなった興味で、不安をまぎらしたように」

78行目『さよなら』父の言葉にも、子どもは終始黙っていた」

130行目「この男の子のおとなしさは、まるでこの頃からの我が家の空気を感じ取って、気兼ねをしていたようだ」

139行目『父ちゃん来い、父ちゃん来い』しかし視線は、走り去る風景が珍らしいというように、…を見たりしているのだ。可憐に弱々しく、無心なつ

ぶやきだけで、男の子は、その言葉を歌っていた」

これらの男の子の描写から「ケイちゃん」は険悪な両親の雰囲気を感じ取り、窓の外を見たりしておとなしくしているが、寂しさや心細さを感じていないわけではなく、ただ黙っているのだ。それを「私」は感じ取り、男の子をいじらしいと思っている。以上を踏まえて②が正解である。

不正解の選択肢

① 「車内の騒がしさに圧倒されて」が本文にない描写。男の子がおとなしかったのは、「気兼ねしていたから」だと「私」は感じている。「この家族が幸せになってほしい」と思っているのだから、明記されていない以上、そう思っていたとは断言できず、言い過ぎである。

③ 「悲しみを慰めている」という記述は本文にない。「気を紛らわす」ぐらの表現が適当だと思われるし、そもそも「悲しみ」だけに感情を限定するのも浅い解釈だ（少なくとも、本文中で「不安感」については言及されている。）。「悲哀を感じている」は具体的に明記されていない以上や言い過ぎ。それもあつたかもしれないが、やはり「悲哀を感じている」とは断言できない。

④ 「家族に対する父親の態度が改まることを願っている」というような「父親に対する批判」だけをメインにするというのは少しポイントからズレてしまっている。設問に「本文全体もふまえた説明」とあるのだから、答えとなる選択肢の中には母親に対する共感・同情、男の子に対する憐憫の情といったものも当然あつてしかるべきだろう。それに、本文119行目から127行目で、「旅立ってしまった妻子のことを考えてひとり寂しく部屋で過ごす夫」の姿を「私」は想像している。やはり、「私」は汽車が発車するまでホームで待っていて男の子と別れの挨拶をした優しい父親の

イメージを捨てきれずにいるようだ。このことを考えても、「夫に対する批判」を前面に押し出すのもやはり良くない。

問6 ・

正解 ①・④

難易度 ★★★★★

所要時間 4分30秒

設問パターン 表現・構成

解説

適当でないものを選ぶ設問ではあらかじめおかしいものが必ず選択肢の中に含まれており、それをいかに効率的に見つけられるかという時間との勝負になる。消去法で考えよう。もし、すぐに判断できない選択肢があればいったん保留にし、より間違っている選択肢があればそれを選び、なければ保留にしたものを再考しよう。

解答選択肢

① 「列車の箱の中全体が、少し疲れてき」たことが、「庶民的な一体感が壊れる」ことを意味するとは考えにくい。よって①が1個目の正解。

② 「普段着のままの格好」「はき古したズックの黒い靴」などの写真表現は、この家族の経済状況を如実に示しており、座席を正規の乗車券に加え、200円（現在の2000円くらい）で買った「私」とはかけ離れていることが想像される。これは正しそうだ。

③ 赤ん坊の泣く様子は38行目から49行目にあるが、ここでは夫が赤ん坊に対し苛々する様子、そんな夫に妻が苛々する様子が描かれており、夫婦の険悪な雰囲気や慌ただしい空気をよく表していると考えていいだろう。

41行目の「妻と対い合って立っている父親は、舌打ちをし、『ほら、ほら』と、妻の肩の上の赤ん坊をあやしなから眉をしかめている」や45行目の『何とか泣きやませせないか』夫は苛々するように細かいかん高い声で言った。妻の方は夫が赤ん坊の口にビスケットをねじり込むようにするときも」といった描写。これは正しそうだ。

④ 「母親が話をするにつれ次第に気持ちを高ぶらせていく様子」とあるが、問4を思い出してほしい。母親は「腰をおろした」はずなので、例文の記述は正しくない。よって④が2個目の答え。

⑤ 「くかもしれない」は普通、断定できない時や推測する時に使う表現である。「私」が妻子と別れたあとの父親を勝手に想像している場面なので「くかもしれない」が多用されている。よってこの選択肢は正しい。

⑥ 写実的に表現することは「私」の観察眼が鋭いということも表している。これも正しそうだ。

(制作…小島朋朗、正木僚)

2016年度 センター試験 本試験 国語

第3問 古文

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★☆☆☆	15分	平安時代末期に成立した説話集。そもそも説話集とは、民間に伝わる口承文芸や書物として伝わって記述されたものが、改めて著されたものであり、作者や成立年代の不明なものも多く、今昔物語集もその例に漏れない。31巻からなる全体のうち、今回は第16巻からの引用である。 『今昔物語集』 受験生は、『宇治拾遺物語』『古今著聞集』『十訓抄』『沙石集』など、ほかの説話集についての知識も深めておければ理想的である。古文で失点したくない人は、正誤判定の決め手になりやすい作品名、成立年代、作者名を中心に勉強することをお勧めする。	2016年度は、『今昔物語集』からの出題だった。古文のセンター試験において、「説話集」というジャンルからの出題は珍しく、文章量の多さもあって戸惑いを感じた受験生

傾向と対策
<p>もいたかもしれない。今回の出題に限らず、センター試験の古文は文章量が年々増えていることに注意が必要だ。古文を読み慣れていなかったり、センター試験特有の語彙、正誤判定、内容説明などの問題演習を積んでいないと、時間配分を間違えて遅れをとることになる。対策としては、問題のパターンをだいたい把握しておき、傍線部の位置や設問文から精読するべき範囲と、読み流してもよい範囲を画定する判断力を身につけること、センター試験で問われるレベルの表現で迷わなくらいの語彙力を築いておくこと、などが挙げられるだろう。</p> <p>このように、センター試験の古文は基礎や経験がものをいい、多くの受験生にとって鬼門となるのだが、2016年度の問題は、おそらくとても簡単に感じられたに違いない。例年に比べて文章量が多く、話が二転三転するとはいえず、現代語とほぼ変わらない表現も多かったことから、驚くほど速く読み進められた人もいただろう。</p> <p>ただし、問題を解くためだけの読解に留まっていたら、せっかく演習のために割いた時間ももったいない。最終部の童が逃げ出す場面や、災厄を祓う呪文によって消えた姿が元に戻ることを知っていた上で男を導いた神の意図など、文章を読むだけではわかりにくい部分もあるので、細部まで読み込んでいってはじめて演習の素材を活かしきれるといえるだろう。実際にセンター試験にも、本文全体を理解しているかを試すような問題があり、文章を深く読む力は重要だ。現代語訳や解説をしっかりと読み込んで、応用の利く力を身につけてもらいたい。</p>

本文解説

前書きの読解

「次の文章は、『今昔物語集』の一節である。京で暮らす男が、ある夜、知人の家を訪れた帰りに鬼の行列を見つけ、橋の下に隠れたものの、鬼に気づかれて恐れおののく場面から始まる」

この前書きはとても親切で、場面の説明までしてくれている。さすがにこの内容を見逃す受験生はいないと思うが、一応確認しておこう。

説話集である『今昔物語集』からの出題であることから、もしかしたら仏教の内容が絡んでくるかもしれないと予想できる（注釈からも予想できる）。

本文の読解

第1段落

男、「今は限りなりけり」と思ひてある程に、一人の鬼、走り来たりて、男をひかへてゐて上げぬ。鬼どもの言はく、「この男、重き咎あるべき者にもあらず。許してよ」と言ひて、鬼、四五人ばかりして男に唾を吐きかけつつ皆過ぎぬ。

現代語訳

男は「もはやこれまでか」と思っているときに、一人の鬼が走ってきて、男を捕まえ、持ち上げた。鬼たちが言うには、「この男は、重い罪があるはずの者でもない。許してやれ」と言つて、四、五人ほどの鬼は、男に唾を吐きかけながら通り過ぎていった。

用語解説

程 一般的な「程度」を表す語。意味がとても広いが、たいいては文脈に照

らして考えることで簡単に解釈できるだろう。

1. 時間 時、ころ、間
2. 空間 距離、広さ、大きさ
3. 人間 身分、間柄など

基本的語彙なのでしっかりとおさえておきたい。

第2段落

その後、男、殺されずなりぬることを喜びて、心地違ひ頭痛けれども、念じて、「とく家に行きて、ありつる様をも妻に語らむ」と思ひて、急ぎ行きて家に入りたるに、妻も子も皆、男を見れども物も言ひかけず。また、男、物言ひかくれども、妻子、答へもせず。しかれば、男、「あさまし」と思ひて近く寄りたれども、傍らに人あれどもありとも思はず。その時に、男、心得るやう、「早づ、鬼どもの我に唾を吐きかけつるによりて、我が身の隠れにけるにこそありけれ」と思ふに、悲しきこと限りなし。我は人見ること元のごとし。また、人の言ふことをも障りなく聞く。人は我が形をも見ず、声をも聞かず。しかれば、人の置きたる物を取りて食へども、人これを知らず。かやうにて夜も明けぬれば、妻子は、我を、「夜前、人に殺されにけるなんめり」と言ひて、嘆き合ひたること限りなし。

現代語訳

その後、男は殺されずに済んだことを喜んで、気分が悪く頭も痛かったが、我慢して、「早く家に帰ってさっきあったことを妻に話そう」と思い、急いで家に入ったところ、妻も子も、男を見ても何も話しかけない。男は話しかけたが妻子は返事もしない。そこで、男は「驚いた」と思つて（妻子の）近くに寄つてみたが、（彼らは）そばに誰かいるとは思っていないようだ。そのと

き、男が理解したことに、「なんと、鬼たちが私に唾を吐きかけたことによつて、私の体は消えてしまったのだ（私の姿は見えなくなってしまった）」と思つたと、悲しいことこのうえない。自分が人を見ることは今までと同じである。また、人が言うことも**問題なく**聞こえる。他人には自分の姿が見えず、声も聞かれない。なので、人が置いたものを取つて食べても、その事に気づかれない。このように夜も明けてしまい、妻子は男のことを「昨夜、殺されてしまったみたいだ」と言つて、たいそう嘆き合つていた。

用語解説

心地違ふ 気分がすげれない。落ち着かない。病気になる。

念ず 我慢する（祈願する）。

とし【疾し】 早い。

言ひかく 話しかける。

あさまし 驚きあきれることだ。

早う（く） なんと。下に助動詞「けり」を伴い、真相に気づいて驚く、というような時に用いる。

障り 差し支え・障害。

第3段落

さて、**日ごろ**を経るに、**せむ方なし**。しかれば、男、六角堂に参り籠もりて、「観音、我を助け給へ。年ごろ頼みをかけ奉りて参り候ひつる**験**には、元のごとく我が身を顕し給へ」と祈念して、籠もりたる人の食ふ物や金鼓の米などを取り食ひてあれども、傍らなる人、知ることなし。かくて二七日ばかりにもなりぬるに、夜寝たるに、**暁方**の夢に、御帳の辺、尊げなる僧出でて、男の傍らに立ちて、告げてのたまはく、「汝、すみやかに、朝ここより罷

り出でむに、初めて会へらむ者の言はむことに従ふべし」と。かく見る程に夢覚めぬ。

現代語訳

そうして、**数日**経つたが、**どうしようもない**。そこで、男は六角堂に参詣して籠もり、「観音様、私をお助けください。長年頼りし申し上げ、参詣しましたその**御利益**として、もとのように私の体を現してください」と祈つて、籠もっていた人の食べ物や寺に寄進された米などを取つて食べていたが、側の人は気づくこともない。こうして14日ほど経つたころ、夜寝していると**明け方**の夢に、御帳のあたりに尊げな僧が出てきて、男の側に立ち、告げておっしゃることには、「お前は、すぐに、朝のうちにここから退出し、最初に会つた者が言うことに従いなさい」と。このように見ているうちに、夢から覚めた。

用語解説

日ごろ 数日。普段。

せむ方なし どうしようもない。

験 御利益。

暁方 明け方。

第4段落

夜明けぬれば、罷り出づるに、門のもとに牛飼の**童**のいと恐ろしげなる、大きな牛を引きて会ひたり。男を見て言はく、「いぎ、かの主、我が供にと。男、これを聞くに、「我が身は顕れにけり」と思ふに、うれしくて、喜びながら夢を頼みて童の供に行くに、西ざまに十町ばかり行きて、大きな棟門あり。門閉ぢて開かねば、牛飼、牛をば門に結びて、**扉の迫**の人通るべく

もなきより入るとて、男を引きて、「汝もともに入れ」と言へば、男、「いかでかこの迫りはさまは入らむ」と言ふを、童、「ただ入れ」とて男の手を取りて引き入るれば、男もともに入りぬ。見れば、家の内大きにて、人、極めて多かり。

現代語訳

夜が明けたので出て行くと、門の側に牛の世話をする童でとても恐ろしい感じの者が、大きな牛を引いているのに出会った。男を見て言うには、「さあ、そのあなた、私の御供になりなさい」と。男はこれを聞いて「私の体は見えるようになった」と思い、うれしく、喜びながら夢をあてにして童の供に行くと、西の方に十町ほど行ったところに大きな棟門がある。門は閉じて開かないので、牛飼童は、牛を門に繋いで、扉の隙間で、人が通ることができないようなところから入るといって、男を引いて、「お前も一緒に入れ」といので、男は「どうしてこんな隙間から入れるだろうか」と言うと、童は「とにかく入れ」と言って、男の手を取って引き入れるので、男も一緒に入った。見たところ、家の中は大きくて、人はとても多い。

用語解説

童 貴族の家などに仕える年少者。

同格の「の」 問1の《参考》(7ページ)にて解説。

第5段落

童、男を具して板敷きに上りて、内へただ入りに入るに、いかにと言ふ人あへてなし。はるかに奥の方に入りて見れば、姫君、病に悩み煩ひて臥したり。跡・枕に女房たち居並みてこれをあつかふ。童、そこに男をめて行きて、小さき槌を取らせて、この煩ふ姫君の傍らに据ゑて、頭を打たせ腰を打たす。

その時に、姫君、頭を立てて病みまどふこと限りなし。しかれば、父母、「この病、今は限りなんめり」と言ひて泣き合ひたり。見れば、誦經を行ひ、また、やむごとなき験者を請じに遣はすめり。しばしばありて、験者来たり。病者の傍らに近く居て、心経を読みて祈るに、この男、尊きこと限りなし。身の毛いよたちて、そぞろ寒きやうにおぼゆ。

現代語訳

童が男を連れて板敷きの上って、中にどんどん入っていくが、なぜ、と言う人はまったくくない。さらに、奥の方に入ると見ると、姫君が病気を患って横になっている。足元と枕元に女房たちが並んで座っていて、姫君を看病する。童はそこに男を連れていき、小さな槌を取らせて、この病の姫君の側に座らせ、頭を打たせ腰を打たせる。そのときに、姫君は頭を起こして、病にこのうえなく苦しんでいる。そのため、父母は「この病は、もうおしまいであるようだ。(この病では、もう姫は臨終である)」と言って泣き合っている。見ると、経を唱え、また、優れた僧を招くように人をやっているようだ。しばらく経って、修験僧がやってきた。病人のそば近くに座り、般若心経を讀んで祈ると、この男(僧)は尊いことこの上ない。「身の毛がよだち、なんとなく寒いようだ」と感じられる。

用語解説

あへてなし まったくない。

悩み煩ふ 病を患う。

あつかふ 世話をする。もてあます。

そぞろ 思いがけない。なんとなく。

第6段落

しかる間、この牛飼の童、この僧をうち見るままに、ただ逃げに逃げて外ざまに去りぬ。僧は不動の火界の呪を読み、病者を加持する時に、男の着る物に火付きぬ。ただ焼けに焼ければ、男、声を上げて叫ぶ。しかれば、男、真頭になりぬ。その時に、家の人、姫君の父母より始めて女房ども見れば、いといやしげなる男、病者の傍らに居たり。あさましくて、まづ男を捕へて引き出だしつ。「こはいかなることぞ」と問へば、男、事のあり様をありのままに初めより語る。人皆これを聞きて、「希有なり」と思ふ。しかる間、男、頭れぬれば、病者、搔きのごふやうに癒えぬ。しかれば、一家、喜び合へること限りなし。

現代語訳

そうしているうちに、この牛飼の童はこの僧を少し見るとすぐさま、ひたすら逃げ出してどこかへ行ってしまった。僧は不動明王の力によって災厄を祓う呪文を読んで、病者を加持祈禱すると、男の着ている服に火がついた。ただひどく燃えるので、男は声を上げて叫ぶ。そうすると、男は、姿を現した(そうすると男の姿は見えるようになった)。そのとき、家人は、姫君の父母をはじめとして女房たちが見ると、ひどくみすばらしい様子である男が、病人である姫君の側に座っている。おどろいて、すぐに男を捕らえてひっぱりだした。「これはどういふことだ」と尋ねるので、男は事の様子をありのままに最初から述べる。人はみなこれを聞いて、不思議なことだと思う。こうしている間に、男の姿が現れると、病人は(病を)ぬぐい去ったかのように平癒した。そのため、一家が喜び合っていることはこの上ない。

用語解説

加持 ここでは祈禱のこと。加持祈禱ともいう。

第7段落

その時に、験者の言はく、「この男、咎あるべき者にもあらず。六角堂の観音の利益を蒙れる者なり。しかれば、すみやかに許さるべし」と言ひければ、追ひ逃がしてけり。しかれば、男、家に行きて、事のあり様を語りければ、妻、「あさまし」と思ひながら喜びけり。

現代語訳

そのとき、修験僧が言うには、「この男は罪があるような者でもない。六角堂の観音様の御利益を授った者である。だから、早くに許されるのがよい」と言ったので、追い出して逃がしてやった。そこで、男は家に帰って、事の様子を語ったところ、妻は、「不思議なことだ」と思ひながらも喜んだ。

第8段落

かの牛飼は神の眷属にてなむありける。人の語らひによりてこの姫君に憑きて悩ましけるなりけり。

現代語訳

あの牛飼童は神の使いであったのだという。誰かの頼みにしたがって、この姫君に取り憑き、苦しめていたということであった。

要約

第1場面 男、鬼に遭遇し、呪いをかけられる(第1、2段落)

鬼の集団に遭遇してしまった男は死を覚悟したが、罪のないことを理由になんとか事なきを得た。しかし、家に帰り妻子に話しかけてもまったく相手にされず、鬼に唾をかけられたことで姿が見えなくなってしまうことに気がつく。妻子は男が死んでしまったと思ひ悲しんだ。(125字)

第2場面 男、観音に祈り、童に出会う(第3、4段落)

男がもとの姿を取り戻そうと、六角堂に籠って祈念していると、明け方の夢で「早朝に退出して最初に出くわした者に従え」とのお告げがあった。そのとおりに牛飼いの童に出会った男は、見知らぬ屋敷に通される。(96字)

第3場面 男、屋敷に侵入する(第5段落)

男は童に渡された槌で、屋敷の部屋で病に臥せている姫君を叩いていたところ、姫君はいっそう苦しそつにする。姫君の両親は娘の病状の悪化に嘆き、僧を呼び、般若心経をよませたが、その神威に男は寒気すら感じるのであった。

第4場面 男、僧の読経で呪いが解かれる(第6段落)

僧を見て童が逃げ出してしまったのち、僧が加持祈祷を行うと、男の着物に火がついた。男が声を上げて叫ぶと、ついにその姿は現れたが、すぐに屋敷の者に捕まってしまう。事情を伝えたところみな不思議だったが、姫君が快復したことで一家は喜んだ。(115字)

第5場面 男、無事に帰宅する(第7、8段落)

僧の「男は六角堂の御利益を頂いた者であり、何の罪もない」という言葉のおかげで逃がしてもらえた男は、家に帰り妻子に事情を伝える。妻子は驚いたが、男の無事を喜んだ。童は神の使いであり、人の頼みで姫君に取り憑いていたということであった。(115字、計552字)

設問解説

問1 21 23

正解 (ア) ③ (イ) ⑤ (ウ) ①

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 1分30秒

設問パターン 知識・解釈

傾向と対策

定番の短文解釈である。この設問においては前後の文脈判断よりも、傍線部それ自体の文法や単語の理解を重視していこう。文脈的には正解としてもよさそうな選択肢でも、文法や単語の解釈に難があれば不正解である。逆にいえば、文法や単語についての知識が盤石であれば、傍線部を見ただけでも正解を選べる設問も多い。日頃から文法や単語の理解を深めていこう。

(ア) 念じて

思考方法

古文の頻出単語。「念じ」はサ行変格活用動詞「念ず」の連用形。「祈る」という現代的な意味もあるが、受験に出やすいのは「我慢する」の方だ。文脈的にもそちらの方がしっくりとハマる。よって正解は③。

解説

熟語「祈念」からもわかるように、現代ではもっぱら「祈る」というような意味で使われるが、古文では「我慢する」という意で使われることが多い。古文においても「祈る」という意味で使われる場合もあることに注意してもらいたい。入試古文の問題では反射的に「我慢する」の意味で解釈することを勧めたい。入試問題は、「念ず」「あはれなり(しみじみと感ぜられる)」「をかし(すばらし)」のように現代語の感覚からすれば意外な意味として使われる単語を問う傾向にあり、そういった単語は十中八九、現代的な意味で問うことはないからだ。

古文の単語帳を持っている人は一度開いて確認してほしいのだが、「念ず」

の項目で、訳「我慢する」の部分は強調されているのではないだろうか。
古文受験の学習においては、このように強調されている意味を反射的に想起できるように訓練しておくことも重要である。

解答への過程だが、まず「念ず」の意味を考えて、選択肢としては

- ② 「祈願して」
③ 「我慢して」

から選ぶことになる。今回の出題では前半部分「心地違なひ頭痛かしらけれども(気分がわるく頭も痛かったが)や、後半部分の『とく家に行きて、ありつる様をも妻に語らむ』と思ひて」「早く家に行つて、先程の様子を妻に話そう」と思つて)の意味から、文脈的にも明らかに「我慢して」の意が正しい。

(イ) いかで/か/この/迫/より/は/入ら/む

思考方法

「いかでか」は反語・疑問の意味で用いて「どうして」、もしくは願望・意志を表す表現とともに用いて「なんとかして」のような意味で使われる。単語の意味だけで選択肢を決めるのは難しそうだ。

文脈を探ってみよう。傍線部の前を読むと、童が男を人の通れなさそうな隙間に通そうとしていることがわかる。男は「通ることができない」、つまり「不可能」を表現したかったとみるのが妥当だろう。よって答えは⑤。

解説

傍線部の直前の部分を、否定と共に用いられる「べき」がもつぱら可能(不可能)の意味なことに注意して訳すと、「扉の迫の人通るべくもなきより入るとて、男を引ききて、『汝もともに入れ』と言へば(扉の隙間で、人が通ることができないようなところから入るといって、男を引いて、「お前も一緒に入れ」というので)とあるように、最後の部分「ので」から、人が通れないよ

うな隙間に通そうとする童に対しての無難な男の対応を選べよとわかる。
以上の文脈をふまえると、助動詞「む」を「いかでか」と呼称させ、「どうして」できようか、いやできない」という反語の意味で傍線部を解釈し、問いかけの部分省略した「この隙間からは入れないだろう」が最もふさわしいといえる。

【参考】同格の格助詞「の」について

傍線部直前の「扉の迫の人通るべくもなき」の解釈について考えてみよう。まず注目するべきは末尾の「なき」である。これはク活用形容詞「なし」の連体形であり、直後に修飾の対象となる名詞が存在しないことから、この部分に省略があるのではないか、という推測が成り立つ。

直前を見ると、現代の日本語に慣れた私たちからすれば、かなり不自然な位置に「の」があることがわかる(「扉の迫の」)。「の」は格助詞であるから、直前の語をどのように格付けているか考えてみるべきであろう。ここで古文をある程度読みなれた人であれば、「の」と連体形止めの呼称による省略なのではないかと気がつくだろう。格付けられる名詞である「迫」を試しに「扉の迫の人通るべくもなき迫」というように補ってみると、意味が通ることを無意識に理解するのである。このように、一つのものを細かく描写する際に、修飾内容の連立を避けるため、修飾の対象となる語を2回使うことがあり、その語を格付ける助詞「の」を同格の助詞とよぶ。また、

このとき同じ語の反復を避けるために修飾される語を後半のみ省略することがあり、今回もその典型例である(「迫」が修飾の対象)。

訳出するときは、同格の助詞は「で」とするのが一般的である。実際に省略を補いつつ訳出すると「扉の隙間で、人が通ることができないような隙間」となる。ここで、訳出自体は文法的に正しできたが、省略されていた修飾の対象となる語(ここでは「迫」)を繰り返してしまうと、せっかくの原文の表現が台無しになってしまうことに気づくだろう。実際はこのように省略された語をそのまま挿入して逐語訳する場合も多いのだが、現代語訳として不自然だといえる。

それでは、どのように訳出すれば現代語として読んでも自然な訳になるのだろうか。ここで、もとの表現は反復を嫌って使われたものであったことを思い返してみよう。つまり、反復させずに表現すれば、きれいに訳出できるのではないだろうか。語の反復を避けるためにもっともよく使われる手法は言い換えである。この例では「迫(隙間)」を別の語で言い換えればよい。手っ取り早いのは、抽象化した「ところ」のような表現であろう。このように考えて訳出してみると「扉の隙間で、人が通ることができないようなところ」となる。

「の」識別は、マーク式回答でも記述式回答でもよく問われるポイントなので、しっかりと理解してもらいたい。この演習で「の」が同格だと気がつかなかった受験生は、一見すると修飾の表現が余っているように見えて、その対象となる名詞が容易には見つか

らないという独特な表現をしっかりとおさえて、次に備えてもらいたいと思う。

(ウ) いか／と／言ふ／人／あへて／なし

思考方法

「いかに」は「どのように・どうして・どんなにか」といった意味で用いる副詞。「あへて」は現代語と同じ「無理に・故意に」といった意味で用いられる古文単語であるが、否定の表現と呼応して「けつして・まったく」といった強調の意となる。漢文の「敢へて」も同様の意味で用いられることは、覚えておいてもいいかもしれない。「どうして?」と言つ人がまったくくない」と大雑把に頭の中で訳して、最も近いものを選ぶと答えは①となる。

解説

直前を見ると、「童、男を具して板敷きに上りて、内へただ入りに入るに」とある。見知らぬ屋敷にいきなり侵入し、中へ中へと進んでいくようなことがあれば、普通は誰かに注意されてもおかしくない。このような文脈の中で考えると、傍線部の「いかにと言ふ」は「どうして(あなたはここにいるのだ)」と言つ」というように解釈できるであろう。

これを意識したと考えれば、選択肢では①の「見とがめる」という表現がとてもしっくりくる。ほかの選択肢は、この部分の訳出が文脈と合わないの
で不正解である。

意識の必要な設問ではあるが、前後の文脈が比較的容易に把握できるので、正解を選ぶこと自体はそこまで困難ではなかったであろう。間違えてしまった受験生は、語句の意味を重視しながらも、文脈もおろそかにしないよう注

意し、読解の演習を続けてもらいたい。

問2 24

正解 ①

難易度 ★★☆☆

所要時間 1分30秒

設問パターン 基本文法説明

傾向と対策

センター試験ではおなじみの基礎的文法問題である。文法知識をしつかりと身につけた受験生であれば、用法まで含めて反射的に解答できるであろうが、まだ学習の浅い場合は一つひとつ確認しながら同じ使われ方をしているものをそろえていく必要があるだろう。そのような場合は記号問題であることで解答しやすく、文法理解の助けになるだろうから、敬遠せずにしつかりと復習に取り組んでもらいたい。

また、最終的に用法を答えられなくても、意味を理解、解釈し、現代語に訳せば十分、ということも付け加えておく。

思考方法

波線部 a から順番に見ていこう。

a 「鬼どもの我に唾を吐きかけつる」

「つる」が完了の助動詞「つ」の連体形であるから同格の「の」を疑ってみるが、文脈的に考えてシンプルに現代語でいう「が」と同じ意味だろう。

b 「男の傍らに立ちて」

これは単純に現代語と共通な「の」の意味だろう。

c 「牛飼^{うしかひ}の童のいと恐ろしげなる」

実際に末尾に「童」を挿入してみれば明らかだが、7ページの《参考》で解説した同格の「の」である。

d 「扉の迫の人通るべくもなき」

《参考》で解説したとおり、同格の「の」。

c と d が同格で選択肢が絞れた。よって正解は①。

解説

そもそも格助詞の「の」にはどのような用法があるか確認しておこう。主なもの次は次の四つである。

1. 主格 直前の語を主語とする。現代語でいう「が」。
2. 連体修飾格 直前が直後を修飾する。現代語と共通で「の」と訳すのが良い。

3. 同格 直前の語と後方に出てくる体言が同じであることを示す（後方の体言は省略されやすい）。

4. 代言の代用 「の」自体が体言（名詞）のような役割となる（現代語でも「これは私のだ」というように用いる）主に話し手と聞き手の間で了解されているものを指す。

a から d に関しては思考方法で書いたとおりであるが、用法を確認しておくと、a は主格、b は連体格、c と d は同格である。残った e についても考えておこう。「男の手を取りて」での用法は、b と同じく、単純に現代語と共通の「の」、連体格であるう。

問3 25

正解 ④

難易度 ★☆☆☆☆

所要時間 1分

設問パターン 内容説明

傾向と対策

前後の文脈を理解できているかどうかを問うだけの設問である。2016年度の古文の出題は、本文の読解自体がかなりやさしかったから、こういった細かい知識の関わらない問題では自然と正答率が高くなり、失点してしまうとほかの受験生と大きな差がついてしまうだろう。しっかり正答することが望まれた。

思考方法

傍線部の男の心情の原因を捉える問題であるから、単純に直前を見てみよう。

「その時に、男、心得るやう、『早^{はや}う、鬼どもの我に唾を吐きかけつるによりて、我が身の隠れにけるにこそありけれ』と思ふに」(その時に、男が理解したことに、「なんと、鬼たちが私に唾を吐きかけたことによって、私の体が消えてしまったのだなあ」と思い)

この部分そのまま原因であると捉えるのが普通であろう。選択肢も迷うことなく一つに決まると思われる。正解は④である。

解説

ほかの選択肢を見ていこう。

①は全体として本文にない内容である。確かに鬼に唾をかけられるのは屈辱かもしれないが、主観による判断で本文に即していない解答を選ばないよう注意する必要がある。

②は「頭が痛く」なったことで、「このままでは死んでしまう」と思ったわけ

ではない。「このままでは死んでしまう」に対応する表現は、1行目の「今は限りなりけり」であるが、これは鬼に気づかれてしまった冒頭での話である。また、死を覚悟して悲しくなったという因果関係自体も誤り。

③の「誰が近くに寄っても」が誤り。妻子が返事をしないのは鬼に唾をかけられ見えなくなった男に対してのみである。

⑤は選択肢全体が「夜も明けぬれば、妻子は、我を、『夜前^{やぜん}、人に殺されにけるなんめり』と言ひて、嘆き合ひたること限りなし」に対応しているが、これは傍線部より後ろなので、因果関係以前に順序が崩れている。

問4

26

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 1分30秒

設問パターン 内容説明

傾向と対策

問3と同じ説明問題であるが、本問は行為の説明である。近年のセンター試験古文は、本文のみならず、問題文も長文化する傾向にあり、古文を読み慣れていかなかったり、問題演習の量が足りない受験生にとっては時間配分が厳しく感じられたかもしれない。しかし、2016年度の問題に限っては、本文の難易度が低かったおかげで長い選択肢の問題も素早く解答できただろう。2016年のセンター古文の中では選択肢の文が長い方ではあるが、確実に解答してもらいたい設問であった。

思考方法

まずは傍線部を分析してみよう。どのような問題であっても、問題作成者

がわざわざその部分に線を引いて問題を作ったのだから、この部分はしっかりと読み込む必要がある。また、今回でいえば設問が傍線部（問題文でいうところの行為）自体の説明であるために、なおさら傍線部は熟読すべきである。

「喜びながら夢を頼みて童の供に行く」（喜びながら夢をあてにして童の供に行く）という内容のない選択肢は多少大胆ではあるが、無視してしまおう。「夢をあてにして」の部分があるのは②、④、⑤の三つだけである。このうち、傍線部直前の「我が身は頭れにけり」と思ふに、うれしくて（）私の体は見えるようになった」と思うと、うれしくて」という「喜び」の直接の原因をおさえられているのは④だけであり、そのほかは、「童についていく」という行為の要因として内容が誤っている。以上により、正解は④である。

解説

男の行為を説明せよ、という設問であるが、ここでいう男の行為とは、ほとんど傍線部のことである。そこで傍線部に対応するであろう部分を選択肢の記述から探すと、すべての選択肢で最後に記述されており、「喜んで（童に）ついていった」という大体の意味は同じであることに気がつく（強いていうと、選択肢④の「夢を頼みて（夢をあてにして）」部分の「夢のお告げを信じて」という訳が一番適切であるくらいだ）。

そこで、すべての選択肢は傍線部の解釈を最後にもってきていることから、傍線部の前を見れば該当する箇所を発見できるだろうと考えて、直前を読むと「我が身は頭れにけり」と思ふに、うれしくて（）私の体は見えるようになった」と思うと、うれしくて（）とあり、④の「自分の姿が見えるようになった」と思って喜び」と一致する、ほかの選択肢にはこの内容がなく、④のほかの部分は「汝、すみやかに、朝ここより罷り出でむに、初めて会へらむ者の

言はむことに従ふべし」「罷り出づるに、門のもとに牛飼の童のいと恐ろしげなる、大きな牛を引きて会ひたり」などと対応しており、間違いはない。ほかの選択肢も見ておこう。

①は「朝六角堂から出てきた人について行くように言われ」と「牛飼が出てきたため」が誤り。六角堂から出るのは男であり、牛飼は門の前にやってきたのである。

②は「元の姿に戻る方法を」、「相談したところ」「すぐれた験者のもとに」が誤り。男は六角堂を出て初めて会った者について行くよう言われただけであり、牛飼に相談はしていないし、行き先については知らされていない。

③は「怪しげな牛飼だったために不安を抱いた」と「半信半疑ながらも」が誤り。牛飼は確かに恐ろしげな容姿をしていたと描写されているが、男が怪しく感じ、不安を抱いたという表現はない。また、男は自分の姿が元に戻ったと思ひ、純粹に喜んで童について行ったのだから、「半信半疑」も誤り。

⑤は「きつと妻子と再会することができるだろう」というのが本文になく誤り。「夢のお告げが信用できることを確信して」というのも本文中の「夢を頼みて」とニュアンスが異なるうえ、夢の段階では六角堂を出て初めて出会った者が牛飼だとは明らかにされていない。

問5

27

正解

④

難易度

★★★☆☆

所要時間

1分30秒

設問パターン

内容説明

傾向と対策

「事のあり様を語りければ」の内容として適切でないものを選ぶ設問。ここでいう「その内容」というのは傍線部自体のことを指すのではなく「事のあり様」の内容であることがわかる。実質的に傍線部までの本文すべての内容を問う設問であり、文章全体の総合的な理解を問われる。急いでいるからといって本文を読み飛ばして内容を確認せずに解答を導くのではなく、しっかりと理解して一つひとつの内容が本文のどこに対応しているのかについても注意を向けて、確実に解答していこう。この、本文と選択肢の文がどう対応するのかを理解して解答する能力は、センター試験対策において極めて重要なので、必須事項として優先的に身につけてもらいたい。

思考方法

各選択肢に一通り目を通していくと、④の「男はく尊い存在となり」に違和感を抱くだろう。この部分に対応する本文を探すと、「心経しんぎやうを讀みて祈るに、この男、尊きこと限りなし」とあるが、ここでいう男は僧のことであり、主人公の男とは異なる。これによって、正解は④である。

解説

すでに述べたとおり、内容把握の設問においては、本文のどこの部分に選択肢の文が対応するか見ていくことが重要である。

本番では、違和感を抱いたらすぐにアタリをつけて根拠を揃えて解答するというのが最もスピーディであるが、復習の際はしっかりと本文と照合して理解を深めてもらいたい。

①は「鬼、四五人ばかりして男に唾つばを吐きかけつつ皆過ぎぬ」「妻も子も皆、男を見れども物も言ひかけず。また、男、物言ひかくれども、妻子、答へもせず」「鬼どもの我に唾を吐きかけつるによりて、我が身の隠れにけるにこそ

ありけれ」などから、この記述は正しい。

②は第3段落の「男、六角堂に参り籠もりて、『観音、我を助け給へ。年ごろ頼みをかけ奉りて参り候まをひひつる験しんごには、元のごとく我が身をあは願ねがひ給へ』と祈念して」とあるから、この記述は正しい。

③は第5段落の「姫君、病に悩み煩ひて臥ふしたり。跡・枕とどに女房たち居並あみてこれをあつかふ。童、そこに男をゐて行きて」とあるから、この記述は正しい。

⑤は第6段落の「まつ男を捕へて引き出だしつ」「験者の言はく、『この男、咎あるべき者にもあらず。六角堂の観音の利益りやくを蒙かぶれる者なり。しかれば、すみやかに許さるべし』と言ひ」とあるから、この記述は正しい。

内容的には二転三転する文章であったが、表現は容易だったので注意して読み進めればしっかりと解答できたであろう。

問6

28

正解

③

難易度

★★★★☆

所要時間

2分

設問パターン

内容説明

傾向と対策

全体を通して文章の内容を尋ねる設問。センター試験では、このような総合問題が必ずといってよいほど出題されるので、あらかじめ意識して読解することも重要である。選択肢を読む際も、「本文中に似たようなことが書かれているが、主語と述語が改変されている選択肢」や、「本文中にはまったく書かれていない上、書かれている内容から推測しても妥当とはいえないものの、

なんとなく正しく思ってしまうような選択肢」には、注意が必要である。特に後者においては、選択肢の内容を否定する明確な根拠がなく、最後まで保留しがちになる受験生も多いだろう。

さらに今回は「本文中では明確に書かれてはいないものの、登場人物の行動から考えて、その意図として妥当なものは正答となる」という紛らわしいパターンの出題である。この部分が2016年度古文のセンター試験において最も難しい部分であろう。本文中に明記されていなくとも、それ以外解釈の余地がない命題を選択肢として提示された場合は、正答としなければならぬ。ただ、この設問においては、ほかの選択肢を間違いと判断しやすかったため、最終的には正解に辿りつけたであろう。それでは実際の設問を見ていこう。

思考方法

順を追って各選択肢を確認していこう。

- ① 験者が「牛飼の正体を暴いて」が誤り。牛飼は験者を見るとすぐに消えたのであった。
- ② 「男の気配をく加減がでぎずに」が誤り。験者は姫君の治療のために呪文唱えたのである。
- ③ 「姫君を加持するく導いた」は本文中では明記されていない。しかし、元の姿に戻してほしい、という男の祈願に対しての観音のお告げのもと、最終的に男は元の姿に戻れたのであるから、解釈としては妥当であるといえる。保留としておこう。
- ④ 「牛飼を信頼して」の部分があるが本文中ではまったく触れられておらず、また、験者の自身が観音であったという記述もない。これらの命題が真であると主張しようにもまったく証拠がない。この記述は、おそらく誤りであ

らう。

- ⑤ 「元の姿に戻すことと引き換えに」が誤り。そのような取引は行われていない。

- ⑥ 「指示を受けてやむなく」「内心では姫君を助けたく思っていたので」が誤り。前者は、人に頼まれて、というニュアンスであり、使役されているとまでは書かれていない。後者は本文中にない上に、頼まれた程度で自主的に行っていたのだから、誤りであろう。よって、保留にしていた③を正解とする。

解説

前述の《思考方法》を踏まえて、より詳しく選択肢を精査し、正答の根拠を明確に解説する。

- ①はそもそも屋敷に入っていくとき、男だけでなく、牛飼にも注意されずに侵入しているのだから、牛飼の姿も他の人には見ることができないのだろう。そのあと、僧を少し見ただけで逃げていった牛飼は、最終的に誰にも正体を知られることなく去っていったのだろう。本文最終段落の作者の種明かしによつて初めて、牛飼の正体が明らかとなる。以上により、験者が「牛飼の正体を暴い」という記述は明確に不適當である。

- ②は験者は姫君の治療のために呪文を唱えていたのであり、そもそも男の気配に気づいたという記述はない。よつて験者は男を助けようとして呪文を唱えたのではない。男の服に火がついてしまったのは事実であるが、それは験者にとっては偶然の結果であったのであり、加減がでぎずに男の服を燃やしてしまったのではないので、この記述は不適當である。

- ③については、牛飼と観音の間の意図の相違について、しっかりと理解することが重要であった。本文中には「童、そこに男をゐて行きて、小さき槌つちを

取らせて、この煩ふ姫君の傍らに据ゑて、頭を打たせ腰を打たす。その時、姫君、頭を立てて病みまどふこと限りなし」(童はそこに男を連れていき、小さな槌を取らせて、この病の姫君の側に座らせ、頭を打たせ腰を打たす。その時に、姫君は頭を起こして、病に非常に苦しんでいる)、「かの牛飼は神の眷属けんぞくにてなむありける。人の語らひによりてこの姫君に憑つきて悩ましけるなりけり」(あの牛飼童は神の使いであつたのだという。誰かの頼みに従つてこの姫君に取り憑き、苦しめていたということであつた)とある。つまり、牛飼は、神の使いではあるものの、男に姫君の病を重くさせる手伝いをさせており、男を元の姿に戻そうとしているわけではないとわかる。

しかし、男の元の姿に戻りたい、という願いに対して為された観音のお告げのもとで、最終的に男は元の姿に戻れている。つまり観音は、牛飼の取り憑ついている姫君の屋敷に男を連れて行けば、最終的に僧の呪文によつて問題が解決すると見越していたと考えられる。

これら二つのことからわかるのは、観音は確かに男を元の姿に戻れるように導いたが、眷属であるところの牛飼はその途中で間接的に使われただけであつたということである。このようにうまく解釈できていれればすぐに正解へ行き着けたであろう。しかし、本文に明記された内容ではないので、ほかの選択肢もしっかりと見極めておこう。

④は③の解説を理解できれば、「牛飼を信頼して」の部分で誤りであるとわかる。観音は牛飼が姫君に取り憑ついていることを見越して、男を従したがわせただけであり、牛飼が男を元の姿に戻してくれるだろうと考えていたわけではない。このあたりは解釈の問題であるが、観音は仏教説話では絶対的な存在なので、眷属を信頼して失敗する、などということはありえないと考えてよい。明確に誤りとは言えないまでも、験者の中身が観音であつたという内容も含め、

本文にはまったくその証拠がないので、この記述は不相当であると判断してよい。

⑤は確かに牛飼は「姫君の病気を悪化させることを男に手伝わせた」が、それと引き換えに男の姿を元に戻すというような取引は行われていない。そもそも、牛飼と会った時点で男は自身の姿が元に戻つたと思ひ込んでいたはずだ。その後も、やはり姿は戻っていなかったと気づく描写もなく、「元の姿に戻すことと引き換えに」といった内容の取引を行うとも思えない。よつて、この記述は不相当。

⑥は「指示を受けてやむなく」の部分が本文最終段落の「人の語らひによりてこの姫君に憑つきて悩ましけるなりけり」(誰かの頼みにしたがって、この姫君に取り憑き、苦しめていたということであつた)と矛盾している。人に頼まれて、というニュアンスであり、使役されているとまでは書かれていない。また、「内心では姫君を助けたく思っていたので」という内容も本文には書かれていない。よつて、この記述は不相当。

(制作：松田朋佳)

2016年度 センター試験 本試験 国語

第4問 漢文

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	15分	『抱経堂文集』 出典も作者も知らなくてよい。作者は清代中期の学者、盧文弨。多くの書籍の校合（二種類以上の写本や印刷された本を比べて、内容や文字の違いを確かめたり正したりすること）を行った。ちなみに「抱経堂」とは彼の蔵書室の名である。	本文の分量は200字程度で、標準的な長さ。最後の作者のセリフがやや難解であるほかは、内容も文法も比較的によさしい。解答の順番は、おおむね本文に沿って、 問3↓問1(1)↓問4↓問1(2)↓問2↓問5↓問6↓問7とするのが最も自然で効率も良いと思われる。 2016年度の問題を解くコツは「狭く、深く読む」ことだ。傍線部とその周辺部分を細かく読み込むことで正解にたどりつくタイプの問題が多かったからだ。よって傍線部とその周辺部分の読み込み、さらに選択肢の検討にはしっかり時間を使ってよい。逆に、本文の内容や使われている文法は比較的やさしかったため、本文の通読はなるべく短い時間で済

傾向と対策
<p>ませたい。</p> <p>問2は「即」と「乃」の意味の違いを知っていれば簡単に解ける、典型的な知識問題。周りの受験生に差をつけるにはこのような設問を確実に正答せねばならない。重要語句・句形の意味を確実に覚えるという、地味で地道な学習をおろそかにしないでほしい。</p> <p>問3では「時時」の解釈が一つの力ギとなった。日常生活でよく使われる〈時々〉の意味に引つ張られ、「時時」を〈時折〉と解釈した③の選択肢を選んでしまった受験生も多いだろう。現代日本語でも使われる語句が出てきた場合、意外な意味で使われていることがあるので油断せずに前後の文脈からも意味を推測してほしい。</p> <p>問4は周りの文にも視野を広げて解く設問。一つ一つの文と構造が似ていることに気づけば「哀」の読み方を推測できる。周りの文から手掛かりを探すのが苦手な人は、日頃から視野を広げて漢文を読むように心がけてほしい。意味や構造がわからない箇所があったら、周りの文に似たような表現や構造の文がないか探してみよう。構造は似ているのに内容は正反対の場合もあり、これも読解の大きな手掛かりとなる。</p>

本文解説

赤は重要語句 青は覚えておくと良い語句

第1段落 亡母を慕う荷宇

書き下し文

荷宇は生まれて十月にして其の母を喪ふ。知有るに及び、即ち時時母を念ひて置かず、弥久しくして弥篤し。其の身の一日として母に事ふる能はざるを哀しむなり。母の言語動作も亦た未だ識る能はざるを哀しむなり。

現代語訳

荷宇は生後十カ月ときに母を亡くした。ものごころがついてからは、いつも母のことを思い慕い続けてやむことがなく、時が経つにつれて（思慕の念は）ますます強くなっていった。（荷宇は）自分が一日たりとも母に孝行することができなかったのを悲しむのである。母の言行もまた知りえないことを悲しむのである。

文法解説

ここでの「知」は「機知」のように「物事を判断する能力」を指し、「及有知」は「物事を判断できるようになる」という意味である。文脈を踏まえてこれを訳すと、「ものごころがついてから」となる。

「時時」には「ときどき」と「いつも・常に」という二つの意味がある。ここでは後者。

「置く」には現代日本語の「置く」意味のほかに「物事をやめる・中断する」という意味もあり、第1段落の「置かず」は「し続ける」と訳せる。ちなみに「擱く」「捨く」「捨つ」なども「やめる」意味をもつことがある。

「事」には「事フ（仕える）」のほかに「事トスル（専念する）」という読み

も存在するので覚えておこう。

助動詞「能フ」は活用語の連体形の下に付き、「不能ハ（あたはず）」のように必ず打消しを伴って不可能の意を表す。

「亦」と同様に「また」と読む主要な字を以下に示し、おもな意味を付した。これらは暗記しておくことが望ましい。

「亦」 くもまた・くも同様に

「又」 そのうえ・さらに

「復」 再び・繰り返し（文脈に応じて訳し分けよう）

「未」は重要な再読文字の一つ。再読文字はどれも頻出なので、意味・読みを合わせて必ず覚えておきたい。

第2段落 夢に現れた亡母

書き下し文

荷宇は香河の人なり。嘗て南に遊びて反るに、銭唐に至る。母の来前するを夢み、夢中に即ち其の母たるを知るなり。既に覚め、乃ち噉然として以て哭して曰はく、「此れ真に吾が母なり。母よ、胡為れぞ我をして今日に至りて乃ち見るを得しむるや。母よ、又た何ぞ我を去ること之速やかなるや。母よ、其れ我をして此を継ぎて見るを得しむべけんや」と。是に於いて夢に見る所に即して之が図を為る。此の図は吾之を見ざるなり。今の図は吾之を見るに、則ち其の母を夢見るの境なるのみ。

現代語訳

荷宇は香河の人である。以前、南方の地を訪れて（故郷に）帰る途中で銭唐に行った。母が目の前にやってくるのを夢を見て、夢の中ですぐにそれが自分の母であるとわかった。夢から覚めると、大声を上げて泣いて言った、

「これは本当に私の母だ。母上、**どうして**今日になって私に会ってくださったのですか。母上、**またどうして**私のもとをすぐに去ってしまったのですか。母上、このまま続けて私に会ってくださることが**できましょつか**(いや、**できないでしよつか**)と。**そこで**、夢で見た(母の)姿に即して母の絵を描いた。(母の姿を描いた)この絵を私は見ていない。(荷宇が持ってきた)いまの絵(＝いま、目の前にある絵)は、私が見たところ、荷宇が母を夢に見ている場面を描いたものに**過ぎない**。

文法解説

「嘗^{かつ}テ」は「以前・ある時」の意。

「遊^{あそ}ブ」には「ぶらぶら歩き回る」「好きなことをして楽しむ(現代日本語の

「遊ぶ」)」「故郷を離れて遠い場所に行く」などの意味がある。ここでは「故郷を」の意。

「即^{すなは}ち」のように「すなはち」と読む主要な字を以下に示し、主な意味を付した。これらは暗記しておくことが望ましい(太字は特に注意が必要な意味)。

「即」 **すぐに・即座に**

「便」 **すぐに・そのまま** (順接)

「則」 **そこで(順接)・すれば** (順接の仮定条件)

「乃」 **そこで(順接)・なんと・意外にも**

「輒^{すなは}ち」 **〜するたびに・〜するたびに**

「既^{すで}ニ(已^{すで}ニ)」は動詞の前に置かれ、過去や完了の意を表す。

「胡^{なんす}為^{なんす}レゾ(何^{なんす}為^{なんす}レゾ)」は疑問の意を表す。

「使」をはじめとする使役動詞は、「使^ムAラシテB(セ)」「使^ムAラシテB(セ)シム」の形で使役の形を作り、訳は「A(体言)にB(述語動詞)させる」と

なる。

使役の形を作る代表的な字を以下に示した。ただしここに載せたのはあくまで訳例の一部であり、文脈によって訳し方が変わる場合もある。なお、読み方はすべて「シム」である。

「使」 AにBさせる・Aを使役してBさせる

「令」 Aに命じてBさせる

「教」 Aに教えてBさせる

「遣」 Aを派遣してBさせる

「又^{また}タ」は第1段落の《文法解説》を参照。

「何^{なん}ゾ」には疑問・反語の意味があるが、ここでは疑問の意。

「其^そレ」は疑問や反語の助字として用いられる場合がある。文の末尾が「ンヤ」となっているから、ここでは反語の助字。

「得」は可能の意。

「可^た」は「ベシ」と読む助動詞で、可能・許可・意志・当然・適当などの用法がある。

「是^{こゝ}ニ於^おイテ」は順接で、訳は「そこで」となる。

「已^{のみ}(耳)」は数量や程度などが限られていることを表す。ここでは「絵に描かれているのは母を夢に見ている場面だけであった(荷宇の母は描かれていなかった)」というように、絵の内容を限定している。

第3段落 作者から荷宇への励ましの言葉

書き下し文

余^よ因^よりて之^{これ}に語^{かた}りて曰^いはく、「夫^それ人^{ひと}の精^{せい}誠^{せい}の感^{かん}ずる所^{ところ}に幽^い明^{めい}死^し生^{せい}の隔^{へだ}た無^なきは、此^これ理^りの信^{しん}ず^べく誣^しひ^ぎる者^{もの}なり。況^{いは}んや子^この親^{おや}に於^おける、其^その喘^{ぜん}息^{そく}呼^こ

吸も相ひ通じ、本より之を問つる者有る無きをや」と。

現代語訳

ゆえに私は荷宇に語って聞かせた、「そもそも人の誠の心が通じ合うことに、あの世とこの世との隔たりがない（＝生死など関係ない）のは、信じてよい道理であり偽りのないことである。まして親子の間柄においては、息づかいまでもが通じ合い、初めから両者を隔てるものなど何もないのだ」と。

文法解説

「夫し」は「そもそも」の意。

「理ノ」の「ノ」は同格の格助詞。

「況ンヤ」は「AハB。況ンヤCヲヤ」の形で用いられ、抑揚の形を作る。

訳は「AはBである。まして、Cはなおさら(B)である」となる。文末に「乎」などの助字がない場合でも、「況」がかかっている句の末尾は「ヲヤ」で結ぶ。

要約

第1段落 亡母を慕う荷宇

荷宇はものごころがつく前に母を亡くし、いつも母を思い慕ってやまず、母に会えないことを嘆いていた。(48字)

第2段落 夢に現れた亡母

ある時、荷宇の夢に母が現れた。荷宇はますます思慕の情を募らせて涙を流し、母の絵と夢を見ている自分の絵を描いた。(55字)

第3段落 作者から荷宇への励ましの言葉

母の夢を見ている荷宇の絵を見た作者は「人の心は生死に関わらず通じ合うものであり、まして親子の間柄ならば元から心を隔てるものなどない」と語

り、荷宇の思いはきちんと母に届いていると諭して力づけた。(96字、計199字)

設問解説

問1 ・

正解 (1) ⑤ (2) ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 文中の語句の意味

(1)

思考方法

「乳児の頃に母を亡くす」と「母を強く思い慕うようになる」という二つの出来事の間起こりそうな出来事は、「ある程度成長する」「母の話聞かされる」。正解は、③か⑤に絞られる。「有知」を③にあてはめて解釈すると、「知母に関する知識」「有外部から得る」となるが、「有」を「得る」と訳すのは無理がありそう。同様に⑤に当てはめると「知物事を判断する能力」「有存在するようになる・備わる」となり、⑤の方が無理なく訳せているし、文脈上も適当。正解は⑤。

解説

「知」に注目しながら前後の文脈を見てみよう。

母を亡くしたとき、荷宇はまだ生後十カ月であった。この時の荷宇には

「知」がなく、母を思い慕うことはなかった。

←

その後、「知」がある状態になってから荷宇は亡き母を思い慕うようになった。

このように整理すれば、「知」は「成長の過程で備わる心のはたらき」すなわち「ものごころ」であると推測できるだろう。

「知」の意味を「知人」や「知識」と考えることで、残りの選択肢ももっともらしく思えてくる。しかし、いずれの解釈でも、「有知」という状態になったことで母への思慕が生まれた理由を直接には説明できない。

(2)

思考方法

「遊」にはいくつか意味があるが、「南に遊ぶ」↓「^{かへ}反る(＝帰る)」という流れになっているからこの「遊」は「行く、移動する」という意味だろう。文末の(注)1と2を見ると、荷宇が帰る途中で通過した銭唐は故郷の香河から千キロメートルあまり離れていると書いてある。よって「故郷を離れる」「遠い場所に行く」という本文の内容に当てはまる④が正解。

解説

「遊^{あそ}ぶ」には「ぶらぶら歩き回る」「好きなことをして楽しむ(現代日本語の「遊ぶ」)」「故郷を離れて遠い場所に行く」などの意味がある。《思考方法》で書いたように、本文と(注)から荷宇は故郷を離れて遠い南方の地を訪れたことがわかる。よって、この「遊ぶ」は「故郷を離れて遠い場所に行く」方の意味だと推測できる。

選択肢③、⑤は「遊ぶ」のいずれの意味とも明らかに合致しないので、不相当。①、②については、「遊ぶ」の意味の一つ「好きなことをして楽しむ」に近いので、漢字の意味から消去するのは難しいかもしれない。しかし、直

後の「反る(＝帰る)」という記述とのつながりを考えれば、「移動」が含まれる④の方が適当であるとわかる。

問2 31

正解 ①

難易度 ★★★★★☆

所要時間 1分未満

設問パターン 「すなはち」の区別

思考方法

完全な知識問題でテクニクの出る幕はない。省略。

解説

「即」「乃」はどちらも「すなはち」と読む。基本的な意味は、即…すぐに・即座に
乃…そこで・なんと(想定外の内容があとに続く)
である。よって正解は①。《本文解説》に「すなはち」と読む主要な字をまとめたので、そちらも参照してほしい(3ページ上段)。

問3 32

正解 ①

難易度 ★★★★★★

所要時間 2分

設問パターン 返り点付き文の解釈

思考方法

選択肢を比較すると、「時時」と「不置」の解釈が異なっている。「不置」

は「くをやめない・くし続ける」という意味だから、正解は①。

解説

「時^じ時^じ」には「たまに」と「いつも・常に」の二つの意味がある。ここでは「いつも・常に」の意味。「時^じ時^じ」をどちらの意味にも当てはまらない「ある日」と訳している選択肢④は、この時点で不適当とわかる。現代日本語では「時々」を「たまに」の意味で使うことが多いため③「時折」を選んでしまいそうになる。単語の解釈間違いでつまづかないためには、常に自分の解釈を疑い、前後の文脈に応じて柔軟に解釈を修正していくことが大切だ。

「置く」には「物事を中断する・やめる」という意味があり、「置かず」は「ある行動をやめない(＝続ける)」という意味になる。よって「念^{ねん}ヒテ置かず」は「思い続けてやまない」という意味になる。①以外の選択肢はいずれも「置く」の解釈が不適当。

問4 33

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 返り点の付け方と書き下し

思考方法

一つ一つの文を見ると「哀^あく^く也」という形が共通しており、この二つの文は内容が対句的になっていると推測できる(現代文でいうところの対句法が使われている)。さらに書き下し文にすると「哀」は文末にくることもわかる。よって①、②を消去。単語に区切ると「哀／其身／不能／一日／事／乎／母／也」となる。疑問詞がないから「乎」は前置詞で、「事」が動詞にな

る。「事」は「事^{つか}フ(仕える)」「とも読むから「母二(対して)事^{つか}フ」となる。正解は④。

解説

傍線部Bとその一つ一つの文は「哀」で始まり「也」で終わっており、また後半部分の訳も共通していて「くないことを悲しむ」となっている。これは構造の似た文を並べて内容を強調するという対句的な表現で、これら二つの文は構造的にも内容的にも対になっていると推測できる。

文末はどちらも「否定＋哀^あシムナリ」であると考えられるから、①と②を消去。また、「哀^あシム」の目的語は「哀^あく^く也」を除く部分であると考えられるので、「母」が「哀^あシム」にかかっている⑤も消去できる。「事」の動詞形は「事^{つか}フ」であり、さらに「事^{つか}フ＋母」となっているから「母二事^{つか}フ」と書き下せる。⑤はこの点でも不適当である。「事」が動詞になっていない③も不適当。

問5 34

正解 ④

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 返り点付き文の解釈

思考方法

直訳すると「母よ、どうして私に今日になって見ることを可能にしたのか」となり意味がわからないが、「見」を「見^まユ(会う・謁^{えつげん}見する)」のほうの意味で訳せば「見^まルヲ得^えシム」は「会うことを可能にした」となる。動作の主体を補えば「母は(荷^に宇と自分自身(＝母)が会うことを可能にした」とな

り、これを荷宇の目線から解釈すると「母が自分(荷宇)に会ってくれた」と意識できる。よって、④が正解。

解説

「胡為」は「なんすレゾ」と読んで疑問形を作る。「使十人十V」という形に気づくことができれば、「使」が使役の用法で使われていることがわかる。「見」という漢字には「目で見える」意味のほかに「会う、謁見する」意味もあり、今回は後者の意味で使われている。「得」は可能を表し、「得見」は「会うことができる」の意。

これを踏まえて「使我至今日乃得見」の部分を直訳すると、「(母が)私(荷宇)を今日になって会わせてくれた」となる。さらに「私(荷宇)」が夢の中で会った相手は母であるから、「母が今日になって私に会ってくれた」となり④を選べる。

ほかの選択肢は「今日になって」より下の部分の訳が不適當。⑤の「母が荷宇の夢を理解した」という記述は本文中に見当たらないので、内容から考えてもおかしい。

問6 35

正解 ③

難易度 ★★★★★

所要時間 2分

設問パターン 本文の内容分析

思考方法

「此図」は一つ前の文で言及されている「母が描かれた絵」のことだろう。よって③か④。二つの選択肢での「今之図」に対する説明は

③「荷宇が母の夢を見る場面の描かれた絵」

④「荷宇が夢を見た土地の風景が描かれた絵(＝錢唐の風景画?)」

となっている。ここで一度本文に戻ると、荷宇は自分が見た夢のことを作者に説明するための参考資料として「今之図」を持ってきた、という事情がわかる。よって「今之図」の説明としてよりふさわしいのは、④「錢唐の風景画」ではなく、③「自分が母の夢を見ている場面の絵」だろう。正解は③。

解説

まず「此図」について考える。指示語「此」があるので直前部分を見てみよう。一つ前の文に「夢に見る所に即して之が図を為る」とあるから、「此図」には「荷宇が夢に見た何か」が描かれていると推測できる。よって「此図」には荷宇の母が描かれているとわかり、この時点で選択肢は③、④に絞られる。

次に「今之図」の説明を探すと、直後に「吾之を見るに、則ち其の母を夢みるの境なるのみ」と書いてある。「境」には「場面・土地・様子」といった意味があり、選択肢③では「場面」の意味で、④では「土地」の意味で訳されている。よって語義だけから正誤を判断するのは難しい。ここで仮に④が正解だとすると、「今之図」はただの風景画ということになる。しかし、夢を見た土地の風景自体がこの話の中で重要な要素だとは考えにくい。しかも《思考方法》で書いたように、荷宇は夢体験を作者に説明するために「今之図」を持ってきたはずなのに、ただの風景画では何の助けにもなるまい。このように考えると、④の「今之図」の説明は不十分といえる。

①、②、⑤は「此図」の解釈が異なる。「此図」の一つ前の文に「夢で見た(母の)様子に即して之(母)の図を描いた」という記述があることから、「此図」には「母の姿」が描かれていると解釈するのが自然であろう。

問7

36

正解 ⑤

難易度 ★★☆☆☆

所要時間 2分

設問パターン 作者の発言の解釈

思考方法

最後の文の後半を見ると、「本無有間之者（最初からこれを隔てるものはない）」とあり、「親子は（離れることはない・固く結ばれている）」が含まれる選択肢③、④、⑤に絞られる。④は文末が「くべきだ」となっているが、当然や適當の意を表す助動詞がないので消去。③と⑤の「」以下の部分を見る。

③ 「子に対する母の思い（母から子への思い）」

⑤ 「母に対するあなた（＝子）の思い（子から母への思い）」

とあり、「思い」の送り手、受け手が逆になっている。ここで最後の文の初めを見ると「子之於親（子が親に対して）」となっており、作者は「子から母への思い」について語っていることがわかる。この文章全体を見ても一貫して「荷宇（子）が母を思う」様子が描かれており、⑤が正解。

解説

本文と選択肢を見比べながら、正解を導き出そう。まず「文目」「夫レ」は「そもそも」の意。「人ノ精誠ノ感ズル所ニ幽明死生ノ隔テ無キ」は、選択肢から「まことの心は生死をも超えて相手に通じる」という意味だとわかる。「此レ理ノ信スベク誣ヒザル者ナリ」の「此レ」は文の前半を指し、「文の前半の内容は（道理であって、確信がもって偽りのないことだ）」と言って文の前半の内容を強く肯定している。「況ンヤ子ノ親ニ於ケル、其ノ喘息呼吸毛相

ヒ通ジ、本ヨリ之ヲ間ツル者有ル無キヲヤ」の「況ンヤ」に注目。「況ンヤ」は「AハB。況ンヤCヲヤ」の形で用いられ、抑揚の形を作る。訳は「AはBである。まして、Cはなおさら（B）である」となる。ここでは

「A＝人（他人どうし）」

「B＝生死に関わらず心が通じ合う」

「C＝親子の間柄」

となり、「人のまごころは、生死に関わらず通じ合うものだ。（他人どうしでさえそうなのだから）」まして親子の間柄なら、元から心を隔てるものなどない（なおさら心が通じ合っているのだ）」という解釈ができる。よって最も適当な選択肢は⑤。作者の発言の意図についての説明にもおかしいところはない。

通読

問題集や模擬試験の解説を読んで、偉そうに淡々と説明するだけの解説者に憤った経験はないだろうか。「ここまで正確に読めたら、そりゃあみんな満点取れるよ！でも試験中は教科書も辞書も使えないし、時間もないからムリに決まってるじゃん(怒)」と。本当にそのとおりだ。そこで、限られた知識と時間の中で受験生が漢文に立ち向かう術をこの《通読》に示した。教科書や辞書が一切使えない状況を想定した「試験場での読み方」なので、ここでは詳細な文法解説などを省略する(詳細な解説は《文法解説》に載せてある)。自分の通読法に不安がある方は、ぜひ本文を通読する上での参考にしてほしい。

通読の読み方

本文は太字にしてある。

(一)「丸カッコ内」…文章を読みながら解答者が頭の中で考えていること。つまり心の声の実況。場合によっては、何とおりかの思考の筋道を示してある。

◎…限られた知識と最低限の文法事項をフル活用して、なんとか内容を理解する上でのポイント。まずはこのレベルを目指そう。

★…漢文が得意な人の心の声。偏差値65以上、あるいはさらに上を目指す人はこのレベルが目標。

「＝」で繋いである部分は、瞬時に頭の中で情報を処理し理解しているという印。上級者になるにつれ、反射的に理解できる部分が増える。類推する時間も労力も初級者より少なくて済むので、楽をして速く読めるのだ。このレ

ベルまでくれば漢文はあなたの強力な得点源となるだろう。

読解の基本

ひねった問題は出題されないのだから、基本的な文法知識と語彙があればほとんど読める。わからない字が出てきたら、その字を含む熟語をいくつか連想して文脈に当てはめてみよう。それでもわからなければ周りの文を見よう。似た意味の字・表現や、対比になる字・表現があればそこから類推できる。どうしてもわからなければ飛ばそう。心持ちとしては、面倒くさがりながら読むのではなく「うんうん、なるほど、それでそれで？」と問いかけてあげるように読むと良い。

それでは、通読開始！

◎ 出典と作者を確認。うん、知らない。序文を確認。

「次の文章は、盧文弼のもとに張荷宇が持ってきた一枚の絵について書かれたものである」

◎ 盧文弼はこの文章の作者。張荷宇はまだ誰かわからない。一枚の絵について書かれた文章だということを念頭に置いて読んでいこう。

第1段落 亡母を慕う荷宇

荷宇は生まれて十月にして其の母を喪ふ。知有るに及び、即ち時時母を念

ひて置かず、弥久しくして弥篤し。

◎ 母が死んでから時間が経って、ますます母への思いが強くなった

◎「有^レ知」になつてからは、「時時」母を思つてやまず、ますます時が経つてますます思いが強くなった。問1の(1)と問3に目を通してみよう。問1はすぐには決めにくいな、飛ばそう。問3を見ると、「置力^ズ」の「止めない」という意味が反映されている選択肢は①しかないから①に決まり。①が正解ということとは、「時時」には「いつも」という意味もあるのか、知らなかった。問1の(1)に戻ろう。『有^レ知』になつてからは母親を思うようになった」ということは、「有^レ知」は母親への思慕の念を抱くのに必要な条件なのだろう。すると、③の「(母親の)うわさを聞く」か⑤「ものごころがつく」に絞られる。「知有^ルニ及^ブ」(知が有る状態になる)の解釈としてよりふさわしいのは、⑤のほうだろう。

★荷宇は生後十カ月の時に母親を亡くした。その後もものごころがついて母親を思い慕うようになったという筋だろう。

B
哀其身不能一日事乎母也。母の言語動作も亦た未だ識る能はざるを哀しむなり。

★問4の選択肢の書き下し文を参考にしながら、単語を見つけて区切ってみる。

哀(選択肢から「哀シム」という動詞だとわかる)

其身(「不能」の主語らしい)

不能(できない)

一日(選択肢から名詞だとわかる)

事(選択肢から「事」か「事フル」だとわかる)

乎(置き字)

母(荷宇の母だろう)

也(なり)

「不能」は「能^ハズ」と書き下すから選択肢①、③を消去。これで「事」が「事フル」に決まった。「事乎母」は「母ニ(対して)事フル」と読めるから⑤を消去。

②と④から正解を選ぶ思考の筋道を二通り示す。

【うしろの部分から推測する場合】

◎傍線部Bと一つうしろの文を比べると「哀^ク也」という構造が共通している上に、「打消+能」も重複して対句のようになっていいる。(対句法っぽい)しかもうしろの文には「亦」があるから、内容にもやはりある程度関連がありそう。すると傍線部Bとこの文は「Aすることができないのを悲しむ。Bすることもできないのを悲しむ」というようにつながるのではないか。これで④に決定。

※ちなみに傍線部Bと一つうしろの文を続けてみると「荷宇は一日たりとも母に孝行できなかったのを悲しむ。母の言語動作(言葉と行動)だから(言)行(だ)らう()もやはり知ることができないのを悲しむ」となり、亡き母をひたすら思い慕って嘆き悲しむ荷宇の様子が対句法を効果的に用いて表現されていることがわかる。

【文の解釈から推測する場合】

★②と④の書き下し文の大意を比べてみる。

②「自分のことを悲しく思い、(それが理由で)一日たりとも母親に孝行できなかった」

④「自分が一日たりとも母に孝行できなかったことを悲しむ」

荷宇はものごころがつく前に母を亡くしているから、②の「自分のことを悲

しく思ったから孝行できなかった」というのはおかしい(生後十カ月の子どもはおそらく我が身を悲しく思ったりはしない)。④に決定。

第2段落 夢に現れた亡母

荷宇は香河の人なり。嘗て南に遊びて反るに、銭唐に至る。

◎「遊ぶ」には〈遊ぶ・楽しむ〉意味だけでなく、〈遊説〉のように移動に関する意味もあったはず。センターではたいてい現代日本語とは違う意味のほうを聞いてくるから〈移動する〉意味のほうだと思っておこう。これで「南方の地に行つて帰つてくる」という文脈が見えだし、ほぼ④に決まり。さらに、「香河と銭唐は千キロメートルあまり離れている」とわざわざ(注)に書いてくれているのだから、これはヒントに違いない! 「遠方」というキーワードが入っているのは④だけ。問1の(2)は④で確定。

母の来前するを夢み、夢中に即ち其の母たるを知るなり。既に覚め、乃ち噉然として以て哭して曰はく、

◎「すなはち」と読む漢字はいくつもあって、「即ち」は〈すぐに〉で「乃ち」は〈そこで〉だったな。問2は①で確定。

母が目の前にやってくるのを夢で見て、夢の中ですぐにそれが本物の母だとわかった。(ものごころがついてから一度も母に会ったことがないのに!)ここで、大声を上げて「哭して」言った。「哭」は慟哭の哭だから「泣く」の意味だろう。

「此れ真に吾が母なり。母よ、胡為れぞ我をして今日に至りて乃ち見るを得

しむるや。

◎此れ(さっき夢に見た「母」は本当に私の母だった。傍線部Cもそのまま訳してみる。「母よ、どうして私に今日になって見ることを可能にしたのか」うん、よくわからない。

★そういえば「見」には「見ユ(会う・謁見する)」という意味もあった。「見」を「会う」と解釈すれば、「見ルヲ得シム」は「会うことを可能にした(会わせてくれた)」となる。荷宇が夢の中で会ったのは自分の母だから、「母が自分に会ってくれた」と意識できる。問5は④に決定。

母よ、又た何ぞ我を去ること之速やかなるや。

◎お母様、またどうして私のもとをこんなに早く去ってしまったのですか?

母よ、其れ我をして此を継ぎて見るを得しむべけんや。」と。是に於いて

◎お母様、「其レ」私に「此ヲ継ギテ」会ってくれる「ベケンヤ」。ちょっとわかりづらいな…。

【急いで読む場合】

◎直前の二つのセリフと同じく「母ヨ」で始まっているし、たぶん母親を恋しがる内容なんだろう。問題にもなっていないし飛ばしていいかな。

【じっくり読む場合】

★「其レ」は指す内容がわからないから保留。前の二つのセリフと同じく「母ヨ」から始まっているし、多分母親を恋しがる内容だろうと察しがつく。「此ヲ継ギテ」会ってくれる「とはどういう意味だろう? 指示語「此」が指す内容がわからないから「継」の意味を考えてみよう。「継」には「続ける」というような意味があるから、「此ヲ継ギテ」は「これに続けて・今回に続け

て」という意味だろう。「〜ベケンヤ」は可能的助動詞に「ンヤ」がついている。語尾の「ンヤ」は反語かな？ 文全体のおおよその意味は「お母様、今回に続けて会ってくださることはできるでしょうか、いやできないでしょうか」となりそう。

※「其し〜ンヤ」は反語の句形だが、ややマイナーな句形なのでとっさに思いつかなくても良い。

夢に見る所に即して之が図を為る。

◎ やつと絵の話が出てきた。荷宇が夢で見たのは母の姿だから、「之」は母を指しているのだろう。

夢で見た母の様子に即して母の絵を描いた。

D 此の図は吾之を見ざるなり。

◎ 「此図」は直前の文に出てきた母の絵のことだろう。よって問6は③か④。「吾」はこの文章の作者の盧文弼。絵の話が出てきたけど、作者は「此図」を見ていないといっているから序文に出てきた絵は「此図」ではないらしい。

E 今の図は吾之を見るに、則ち其の母を夢見るの境なるのみ。

◎ 「今之図」は盧文弼が見ているから、序文で言及されていた「一枚の絵」は「今之図」を指しているらしい。「今之図」の内容は「母を夢見るの境だけ」だと書いてあるけど、意味がよくわからない。

問6の選択肢で残っているのは③と④。「今之図」に対する説明は、

③ 「荷宇が母の夢を見る場面の描かれた絵」

④ 「荷宇が夢を見た土地の風景が描かれた絵」

となっている。④だと「今之図」はただの風景画ということになるが、銭唐が特別な場所だという記述もなかったし、これではほぼ荷宇の母と無関係なのでは？ ここまでの文章は荷宇が一心に母を慕う内容を書き連ねていたのだから、やはりこの絵も荷宇の母と密接な関わりをもっていると考えられそう。③「母の夢を見ている場面の絵」と④「母の夢を見た土地の風景画」を比較すると、③のほうが荷宇の母に関係の深い絵だと考えられる。

【別の考え方】

★作者・盧文弼はどのような状況で「今之図」を見ているのか考えてみよう。序文に戻ると、荷宇はこの絵を作者のもとに持ってきたと書いてある。おそらく荷宇は自分が描いた絵を見せながら、幼い時に母と死別したことや銭唐で見た夢の内容を作者に説明しているのだと考えられる。そういう場面で荷宇が作者に見せる絵として、銭唐の風景画というのはおかしい（「旧友に再会した」という話をするときに、旧友と出会った場所の風景を撮影した写真だけを見せても仕方がない）。そう考えると、荷宇が持ってきたのは「自分が夢を見ている場面の絵」だと考えるのが妥当なのではないだろうか。

第3段落 作者から荷宇への励ましの言葉

F 余因りて之に語りて曰はく、

◎ 盧文弼が荷宇に語った言葉だ。

「夫れ人の精誠の感ずる所に幽明死生の隔て無きは、此れ理の信ずべく誣ひざる者なり。」

◎ そもそも、人の「精誠ノ感ズル所」に生死の隔てがないのは、これ「理」

の信じるべきであり偽らないものである。ちょっと言葉が難しいな……。ヒントを探そう。問7の選択肢を読むと、「誠」や「生死」という言葉が共通しているから「まことの心は生死をも超えて相手に通じるものである」という部分がこの部分の訳にあたるとわかる。

況んや子の親に於ける、其の喘息呼吸も相ひ通じ、本より之を聞つる者有る無きをや」と。

◎大雑把に直訳すると、「まして子どもは親に対して、その息づかいまでも互いに通じ、初めからこれを隔てるものはない」となる。「況んや」は抑揚の句形を作る。「子ノ親ニおケル」は言い回しが少し難しいけど、これまでの荷宇のエピソードを踏まえれば、この一文は親子のことについて述べていると推測できる。前の文が「まことの心は生死をも超えて相手に通じる」という内容であること、この文が「況(まして)」から始まっていることを合わせて考えると、「親子という特別に親しい間柄ではなおさら心が通じ合っていて、両者を隔てるものは何もない」というような内容だろう。ここで問7は③と⑤に絞られる。

次に作者の発言の意図について考えてみよう。この発言は「之(荷宇)ニ語リテ」言ったものだから、独白ではなく荷宇に何かを伝えたくて言ったセリフなのだろう。荷宇は、せっかく夢で母に会えたのに夢から覚めたらまた会えなくなってしまったことを嘆いている。そんな荷宇に対して作者が「親子の間柄ではなおさら心が通じている」と伝えた意図は、「あなた(子)の思いはちゃんと母に届いているよ」と荷宇を励ますことであつたのではないか。問7は⑤だろう。

(制作…小林美桜、津田智沙)